II. 遺跡調査の概要

一色城跡（本発掘調査B）

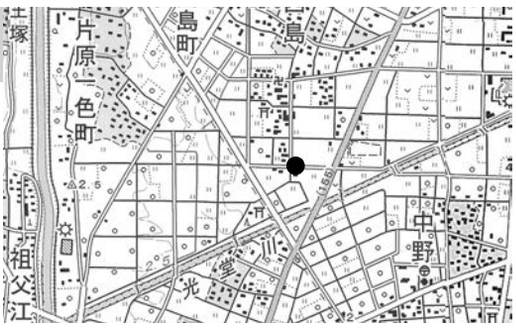
所在地　稲沢市西島本町
（北緯35度15分00秒　東経136度44分58秒）

調査理由　県道給父稲沢線道路改良工事

調査期間　令和元年7月～12月

調査面積　2,500㎡

担当者　樋上 昇・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「竹鼻・一宮・津島・清洲」）

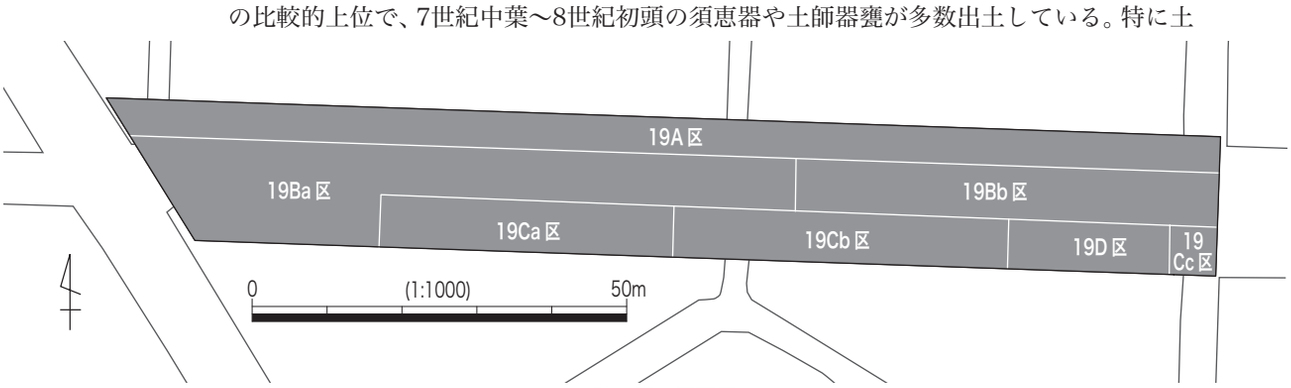
調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。今年度の調査対象地は、東西約139mの現道および両側拡幅部分（幅計約18m）である。事業地内に現用水路や水田があり、また工事と併行する時期が生じたため、調査区は19A・19Ba・19Bb・19Ca・19Cb・19Cc・19Dの7区に分けられた。

立地と環境　遺跡は、尾張平野北西部の沖積低地に所在し、東に三宅川、西に日光川が流れる自然堤防地帯に立地する。今年度の調査区は、おおむね南北方向にのびる自然堤防を横切るかたちで設定されている。遺跡は、全体的に耕作などで上部が削平されている。そのため、遺構検出面はおおむね水平であるが、調査区東端で後背湿地とみられる凹地が検出されたことから、調査区東半部は、東および南方向への緩傾斜地形に相当すると考えられる。

調査の概要　検出された遺構は、古墳時代前期、飛鳥時代～奈良時代、室町時代～江戸時代である。とりわけ最大の遺構は、調査区西端で検出された一色城（戦国時代）の堀跡である。一方で遺物は、弥生時代後期の土器が若干あるが、飛鳥時代～奈良時代の土器が最も目立つ。遺構面は大きく2面あり、古墳時代前期～奈良時代の遺構が、砂質シルトの基盤層上面で黒褐色シルトの遺物包含層を伴って検出され、室町時代～江戸時代の遺構が、それらを覆う灰黄褐色シルト層の上面で検出されている。後者の灰黄褐色シルト層は、稲沢市域で広くみられるもので、調査区内では最大厚は約0.3mである。層中からは山茶碗が出土する。

古墳時代前期　19A区と19Ba区では、基盤層上面で古墳時代前期の溝と掘立柱建物跡が検出されている。溝530SDは概ね東西方向に約8.6m延びてその両端で南方向に湾曲しているが、その先は削平されていて不明である。溝とその周辺で出土した土器は、S字状口縁台付甕と高杯が主体で、時期は廻間式～松河戸Ⅰ式である。

飛鳥・奈良時代　19A区には、溝530SDの北側に併行して東西方向へ約24.5m延び、両端が調査区外の北側へ曲がる飛鳥～奈良時代の溝128SDがある。溝幅は約1mを測り、黒色粘質シルト層の比較的上位で、7世紀中葉～8世紀初頭の須恵器や土師器甕が多数出土している。特に土



一色城跡の調査区配置

師器甕は長胴の伊勢型で、横倒しの出土状況であることから、7世紀末までに溝の機能が停止していたと想定される。

一方溝128SDから東側では、主に8世紀の建物遺構が分布している。内訳は竪穴建物跡が18基、掘立柱建物跡が4基である。竪穴建物跡は、全形が判明したものはないが、平面規模は一辺が3.0～4.7mとみられる。これらは削平が著しく、大半が床面付近しか残存していないが、一部では壁溝や柱穴が検出されている。一方で、カマドやその可能性がある焼土遺構はほとんどみられない。遺構内からの出土遺物は小片が多いものの、特徴的なものとして、底部内面に「美濃」刻印のある須恵器杯1点や鉄鉢形須恵器が出土している。掘立柱建物跡の中には、布掘状の掘り方（19Bb区282SD）となるものが1基ある。当該遺構は出土遺物が寡少であるものの、竪穴建物跡を切り込んでいることが判明している。建物跡の方位は、正方位と斜方位が混在している。竪穴建物跡には古墳時代のものが含まれている可能性もあり、時期別にみた建物方位の変遷については今後の検討課題である。

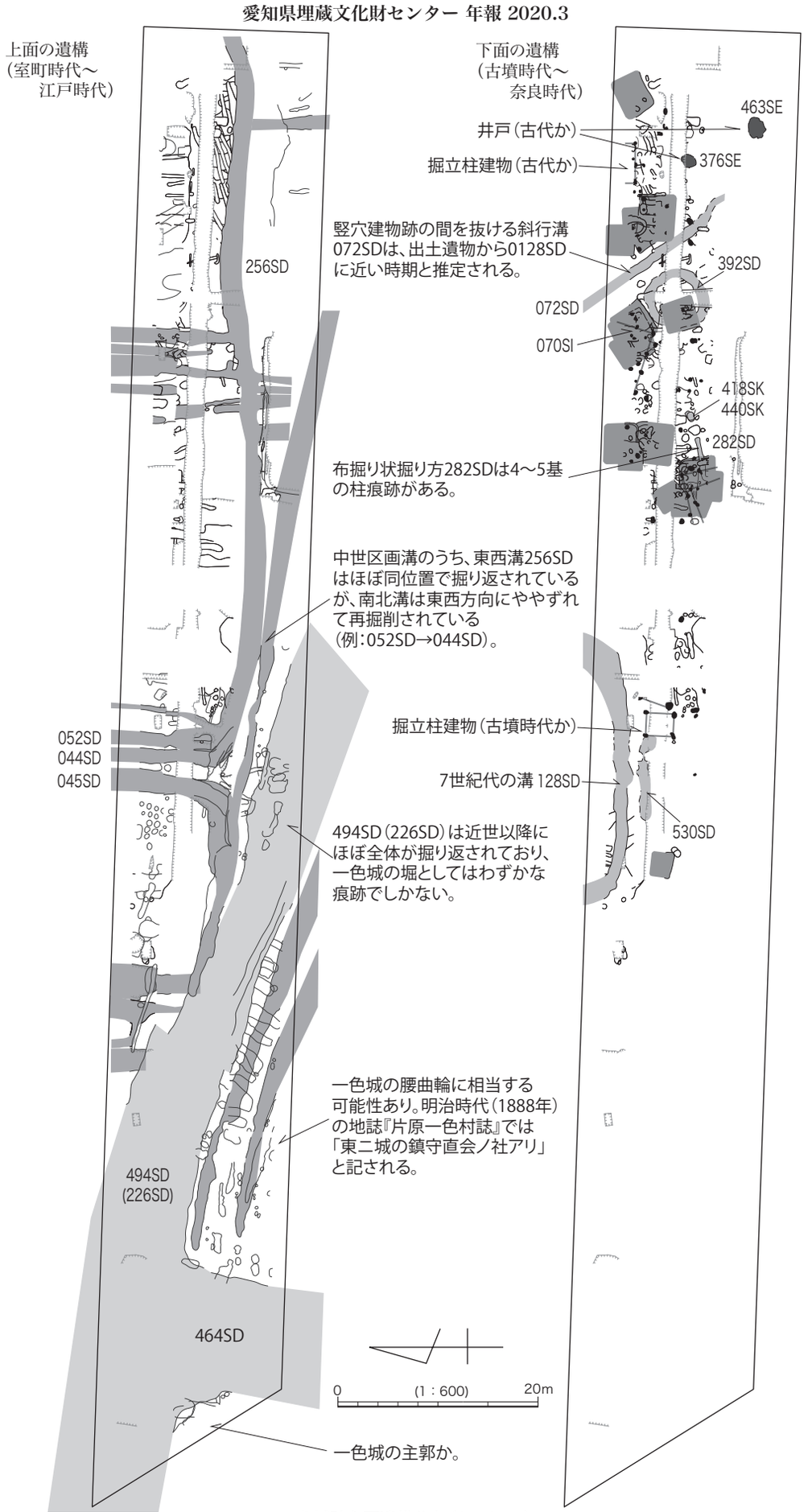
7～8世紀代に推定される特殊な遺構として、井戸2基と周溝状遺構がある。井戸は調査区南東部にある。井戸側などの構造物は未検出である。19 Bb区376SEでは焼土や炭化物の集積層がみられ、桃核が出土している。19D区463SEでは板状木製品が出土している。一方、周溝状遺構19Bb区329SD(19A区158SD)はやや不整な円形を呈し、外周の直径は約6.2mを測る。溝の断面は立ち上がり角度の急な逆台形で、深さ約0.3mを測る。堆積層の比較的下部で、7世紀末～8世紀初頭の須恵器杯が出土している他、遺構そのものを竪穴建物跡が切り込んでいることから、集落に先行する時期に構築されたと考えられる。遺構の性格を特定できる遺物はなく、中心部分に撹乱を受けているが、規模・形状から終末期の円墳の可能性がある。また当該遺構の西約9mの地点には、土坑墓と思われる長軸約1.1mを測る隅丸長方形の土坑440SKがある。埋土からは棒状鉄製品が出土している。

中世区画溝

8世紀の土器が出土する建物群が廃絶した後は、遺構・遺物の希薄な期間が続く。次にみられる遺物は、山茶碗の尾張第8～9型式である。遺構は区画状の溝群で、屋敷地を区画していたと推定される。最も溝群が集中するのは19Ba区で、並行する2条の南北溝がそれぞれ東と西へ屈曲して引き続き東西溝となる地点がある。2条の南北溝からは、溝群の中で最も中世陶器類が集中して出土している。溝間は道路だった可能性もあり、当該期に集落内の主要な場所になっていたと考えられる。一方、区画内の状況は不明な点が多く、若干の柱穴が、灰黄褐色シルト層の上から掘り込まれている程度である。

一色城の堀

19Ba区西端で検出された一色城跡の堀464SDは、南北方向に約12m分を検出した(19A区では撹乱により滅失)。規模は、幅約13.0m深さ約1.1mを測る。立ち上がりは緩く、断面形は逆台形よりも皿状に近い。堀底は旧河道の細粒砂層に到達しており、同層中には流されてきた樹木が多数出土している。これに対して堀の堆積は灰色粘土層で、断面観察では複数回の掘り返しが認められる。出土遺物は極めて少なく、底近くで16世紀代と考えられる漆椀が出土している。調査区北端には堀と東西方向の堀との交差点がある。東方向へは途中でやや南へ方位が振れている（19Ba区494SD、19Ca区246SD）。当該遺構の南側には、全体的に削平を受けたとみられる区画があるが、明治時代の地誌などから城の腰曲輪に相当するものと考えられる。また494SDでは、近世以降にほぼ全体を掘り返していることが確認され、溝として近代まで機能していたとみられる。これによって、北の西島村と南の片原一色村に分かれており、一色城跡は片原一色村に属している。



一色城跡主要遺構分布（S=1/ 600）

ま と め　一色城は、織田家の家臣である橋本氏が８代にわたって城主であったと伝えられ、特に橋本一巴は、織田信長に鉄砲を指南したことが『信長公記』に記されている。しかし17世紀初頭に廃城になった後は、『寛文村々覚書』などの地誌に片原一色村の「古城跡」として記されているのみで、その所在も不明となっていた。近年には地籍図からの推測もなされていたが、発掘調査で遺構が検出された意義は大きい。尾張平野には多数の中世・戦国城館が存在したことが知られているが、城主が判明しかつ具体的な規模が明らかにできた事例として特筆される。（永井邦仁）



遺跡全景（南東から）



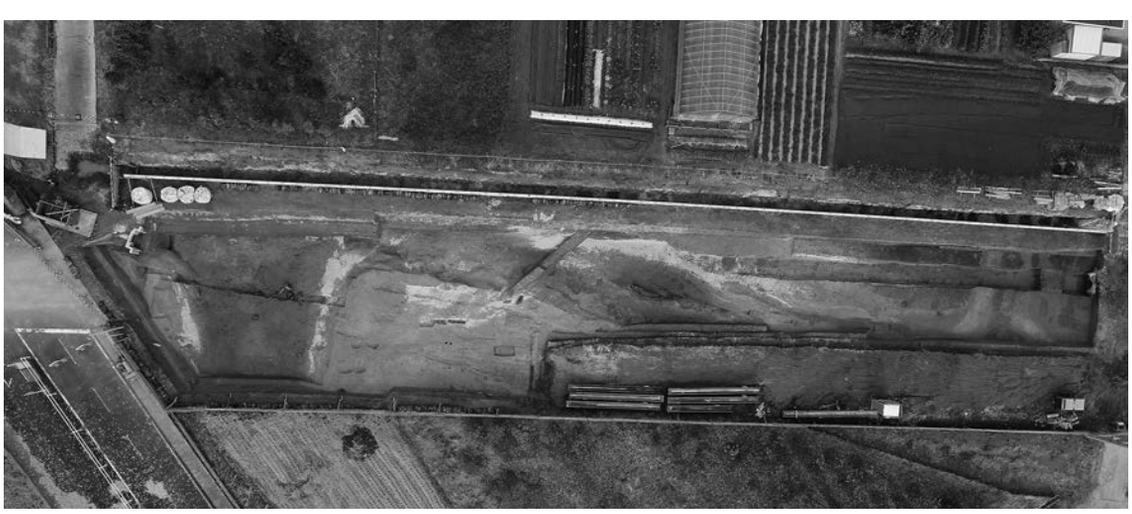
土師器長胴甕の出土状況（128SD）



周溝状遺構 392SD（西から）



竪穴建物跡 070SI（北西から）



一色城の堀 464SDおよび494SD（上空から）

一色青海遺跡（本発掘調査B）

いっしきあおかい

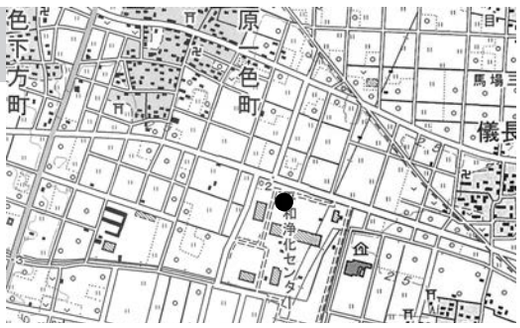
所在地 稲沢市一色青海町地内
（北緯35度14分10秒　東経136度45分20秒）

調査理由 日光川上流流域下水道事業

調査期間 令和元年5月～令和元年10月

調査面積 1,800㎡

担当者 樋上 昇・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「津島・清洲」）

調査の経過

調査は愛知県建設局下水道課一宮建設事務所による日光川上流流域下水道事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて令和元年5月から令和元年10月にかけて実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地であり、近代の耕作土および床土を除去した１面目として平安時代～江戸時代までの遺構を扱い、１面目の遺構除去後に検出される弥生時代中期後半の遺構を２面目として扱っている。調査面積は1,800㎡である。

立地と環境

一色青海遺跡は三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道自然堤防上に位置している。遺跡周辺の現況は、点在する集落以外は水田や耕作地として整備され、区画整理も進んでいるため、旧地形が窺える場所は無い。現況の遺跡周辺の標高はわずかな差であるが、北より南が低く、東より西が低い。

地下水位は高く、標高0.5m以下では湧水が発生する。現代の水田耕作土底面の高低差にも影響されるが、遺構検出面は標高0.2m～1.0m付近に位置するため、調査には常時排水設備が必要となる。

調査区周辺では、大規模な撹乱を受けている部分もある。撹乱に投棄されたゴミの年代から、浄化センター建設と同時期に掘削された撹乱も確認された。

調査の概要

過去の調査結果から、一色青海遺跡では北西から南東に流下する旧河道が2009年度調査区内で北東に向きを転じ、2018年度調査区中央を北に抜ける状況が検出されている。今年度の調査区は集落中心部の北に位置し、調査区の西端と南東端に旧河道と大溝が検出されることが想定され、ほぼ想定された位置に旧河道、大溝は検出された。

その一方で、集落部分を挟んで旧河道の対岸部分に当たる今年度の調査区中央部分は遺構が希薄で、建物跡や方形周溝墓は検出されておらず、居住域や墓域としての利用は行われていなかったことが判明した。

また、弥生時代に耕作地として利用された可能性を探るため、複数の弥生時代の溝や堆積土と考えられた土壌サンプルを採取しプラントオパールの検出を試みたが、検出されなかったことから、本調査区周辺で耕作が行われた可能性は低いと考えられる。

1面の遺構（中近世）

１面目の遺構は調査区北半部で多く検出された鎌倉～室町時代の土坑（方形土坑）が主なものであり、長辺が２mを超えるものは５基検出された。大型のものは011SK、025SKがあり、011SKは長軸3.8m、短軸2.6m、深さ０.7mを測る。遺物は弥生土器破片も検出されたが、中世に掘削された際に包含したものと考えられる。

2面の遺構（弥生時代中期後半）

弥生時代の遺構は、大溝と旧河道が主で、大溝は調査区西端部で200SD、600SD、旧河道は調査区東西両端で400NRが検出された。200SDから400NRまでの断面を精査するために、調査区西半部に流路に直行する畔を設けた。断面観察による重複関係から、こ

の地に弥生時代中期後半の集落が構えられた最初期に400NRが存在し、400NR埋没後に600SDが新たに掘削され、600SD埋没後に200SDが改めて掘削されたことが断面観察より判明している。これらの遺構は全て弥生時代中期後半に属し、既出の居住域や墓域と並存したことが確認されている。各々の遺構の規模は断面部分で200SDが幅7.79m、深さが1.8m、600SDが幅6.23m深さ1.7m、400NRは幅21.73m深さ２.2m以上である。

出土遺物は過去の調査に比べると点数は少なく、特に状態の良いものは、土器は完形の細頸壺１点、木製品は組合せ鋤1点、板材１点等がある。

200SDの埋没後は、浅い082SD（自然流路・055SD、054SDも同様）が蛇行しつつ流れていた。埋土は特徴的な灰白色のシルトと黒色シルトの互層で、灰白色のシルトは広域に広がる洪水堆積層と考えられている。同じ埋土は2018年度調査区の方形周溝墓の周溝最上層、あるいは200SD最上層部に確認でき、当初は200SDの最上層（最末期）にこの埋土が含まれると考えたが、今年度の調査では、200SDと600SDにまたがる状態で082SDが検出されたことから、200SD埋没後の近い時期に堆積した別の遺構（自然流路）と判断した。この埋土の植物珪酸体の分析により、082SD（055SD、054SD）には生活排水を含まない清流が流れていたことが明らかとなった。

断面に見える地震の痕跡

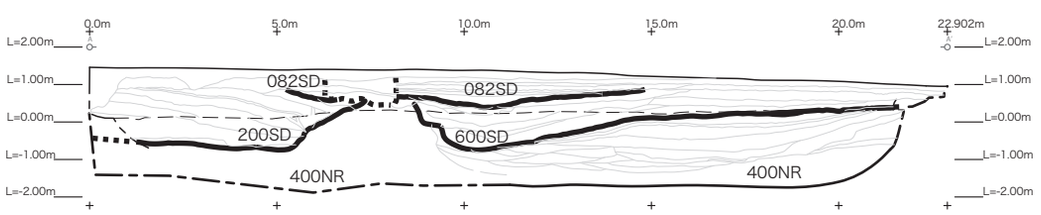
断面観察によると、200SDと600SDの境界付近を中心に地震による影響を強く受けた状況が観察された。地震による影響が観察されるのは、液状化、流動化、砂脈、噴砂がある。性質上最も影響を受けるのが堆積中の砂質であり、液状化の際に強力な浮力を持つことで、周囲の層を変形させるなどの現象も起きている。200SDと600SD境界部分は、400NRが埋没した部分であり、200SD、600SDに比べて砂の堆積が多いことも原因と考えられる。

その他、030SKは炭化物と弥生土器の破片を多く検出した土坑である。平面形は楕円状であり、同様の遺構は、2018年度調査区の234SK、273SKがある。

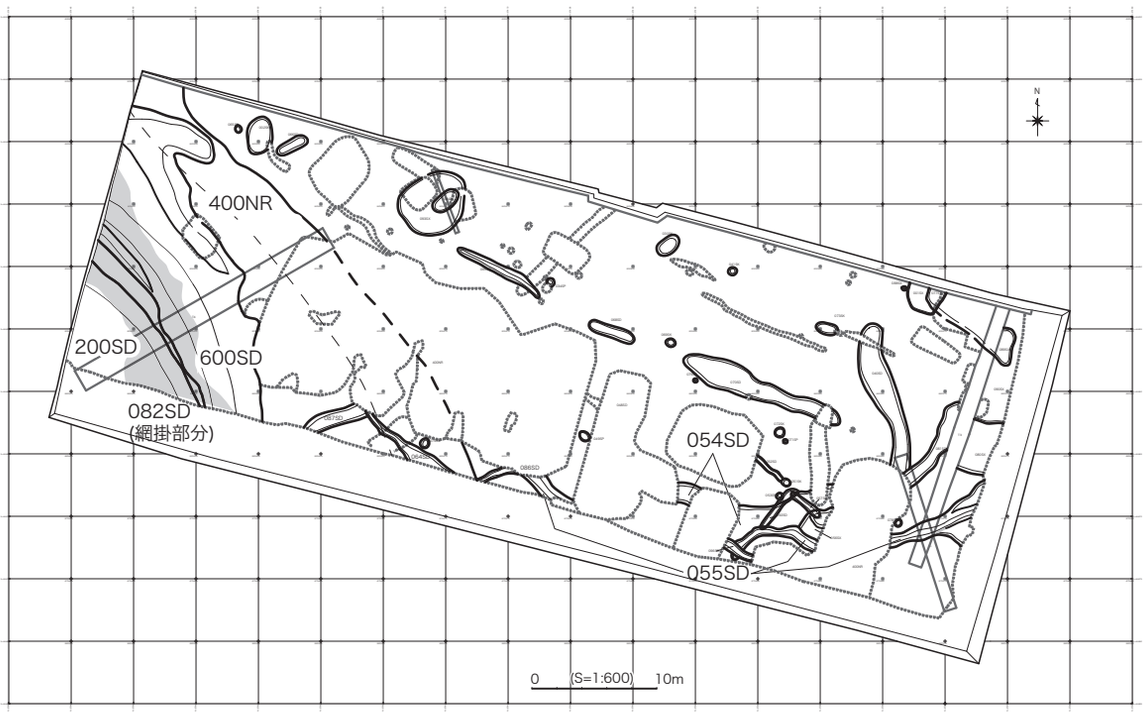
まとめ

2018年度の調査成果から、200SD最上層や方形周溝墓周溝最上層に見られる洪水堆積層は、一色青海遺跡に営まれた集落が洪水等によって居住が困難となった結果、廃絶した可能性を示すと考えた。しかし2019年度の調査では、これらの洪水堆積が200SDの上層には含まれず、200SDや600SD埋没後の別の遺構082SD等として検出され、先述の通り生活排水を伴わない清流であったことが判明した。洪水堆積層が堆積した時点ではすでに集落が存在していなかった可能性が大きい。当然ながらこの時点では大溝や河道はすでに埋没しており、集落の生業に大きく関わる運河としての大溝（200SD・600SD）、河道（400NR）の存否が集落の存続に直結していた可能性も考えられる。集落存続中は400NRの埋没に伴って600SD・200SDが改めて掘削（浚渫）され大溝の機能が維持されたのに対し、200SD埋没後の時点では集落よりも上流部での流路の変化や水量の減少によって大溝の機能が維持できなくなったと思われる。

（鈴木恵介）



082SD、200SD、600SD、400NR断面図（S=1/200）



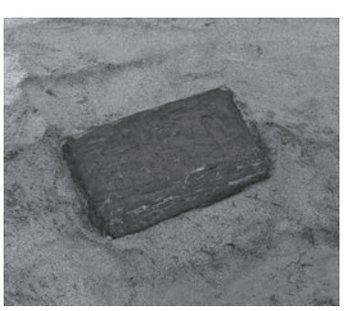
一色青海遺跡 2019年度調査第２面（弥生時代中期）遺構配置図



一色青海遺跡 2019年度調査第２面（弥生時代中期）完堀状況写真



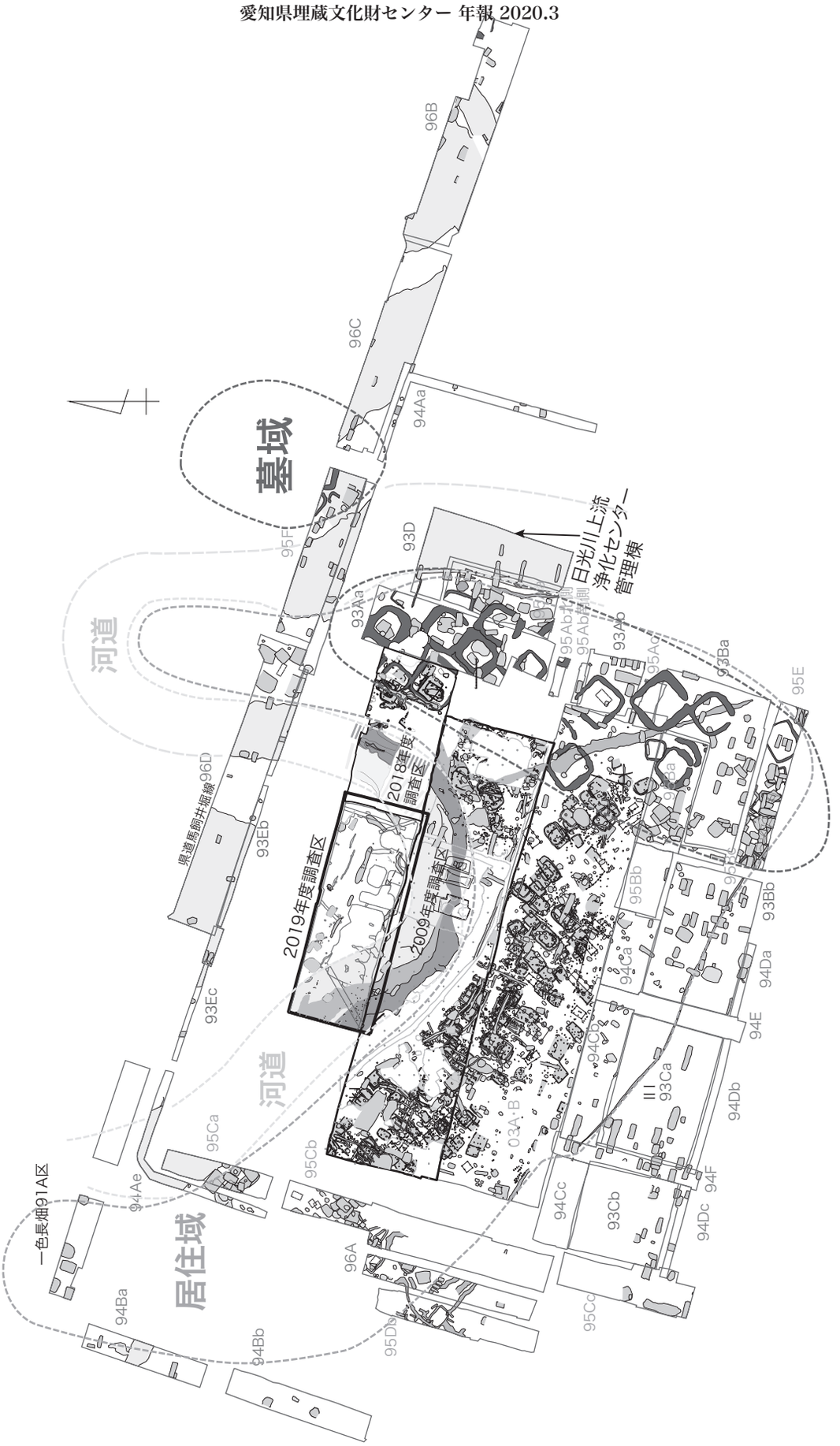
004SK断面（古代～中世）



400NR出土板材（弥生時代中期）



400NR出土細頸壺（弥生時代中期）



一色青海遺跡集落模式図（弥生時代中期後葉　S=1/2,000）

白木（しらき）遺跡（本発掘調査B）

所 在 地　丹羽郡大口町豊田
（北緯35度18分50秒　東経136度52分59秒）

調査理由　一般国道155号道路改良工事

調査期間　令和2年2月～3月

調査面積　370㎡

担 当 者　樋上 昇・早野浩二



調査地点（1/2.5万「小牧」）

調査の経過　発掘調査は道路改良工事（一般国道155号）に伴う事前調査として、一宮建設事務所道路整備課から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。今年度の発掘調査は同年度６月の愛知県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査の結果、国道155号沿いに遺跡が広がることが確認されたことを受けて実施したものである。

立地と環境　白木遺跡は五条川左岸の自然堤防上の縁辺に立地する古墳時代から平安時代の遺跡である。現況は畑地である。遺跡は圃場整備の際に遺物が発見されたことを契機として、昭和47年に緊急調査が実施され、古墳時代の竪穴建物２基、「人」と刻書された奈良時代の須恵器等が検出されている。遺跡の東には径約12mの円墳である白木古墳がある。

調査の概要　今年度の調査区は現五条川に向かって傾斜する地形に相当し、今回の発掘調査で遺跡の西端を確認した。調査区西半は褐色を基調とする包含層状の堆積が確認された。層中の土器は下層が古墳時代前期、上層が古墳時代後期から平安時代の土器を主体とする。

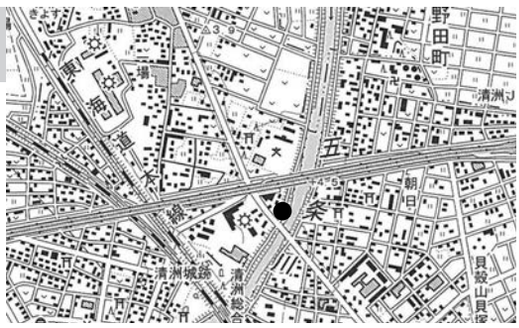
調査区東端は黒色を基調とする古墳時代前期の包含層が良好に残存する。包含層の上面においては、竈を敷設する奈良時代の竪穴建物等、古代の遺構が検出されている。出土遺物には土師器、須恵器、土錘、鉄製品等がある。黄褐色を基調とする基盤砂層上面においては古墳時代前期を主体とする溝、土坑等、多数の遺構が検出されている。（早野浩二）


遺構検出状況（古代）


調査区全景

きよすじょうかまち 清洲城下町遺跡（本発掘調査B）

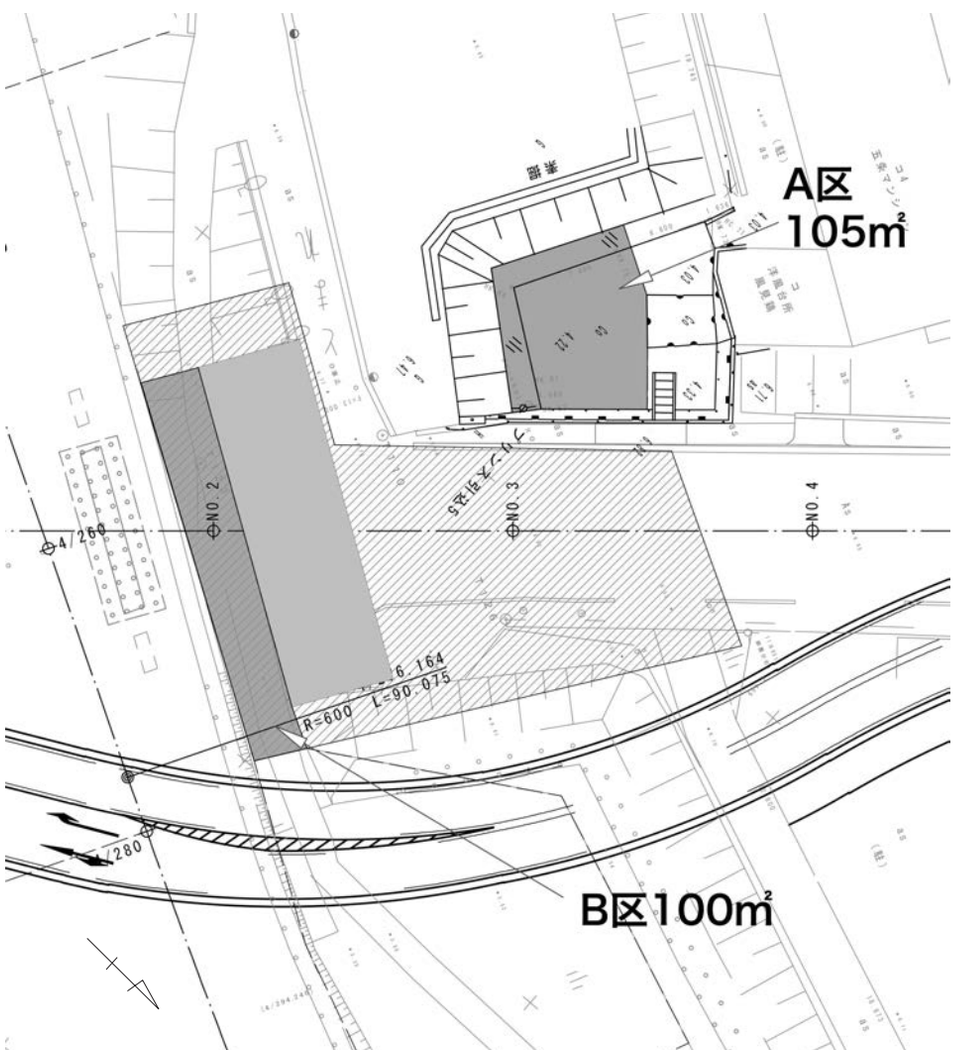
所 在 地 清須市一場矢倉地内
（北緯35度13分09秒 東経136度50分37秒）
調査理由 橋梁整備工事
調査期間 令和2年2月～3月
調査面積 205㎡
担 当 者 樋上 昇



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過 発掘調査は、県道190号線の清洲橋掛け替え工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

調査の概要 清洲城下町遺跡は五条川を城の縄張りに取り入れた近世城郭である。今回の調査は清洲橋の橋梁掛け替えにともない、清洲橋北詰の西側窪地（19A区）と、五条川右岸の清洲橋橋梁直下（19B区）の2か所について発掘調査をおこなうこととなった。調査面積は19A区―105㎡、19B区―100㎡の合計205㎡である。（樋上 昇）



調査区位置図（S=1/500）

朝日（あさひ）遺跡（本発掘調査B）

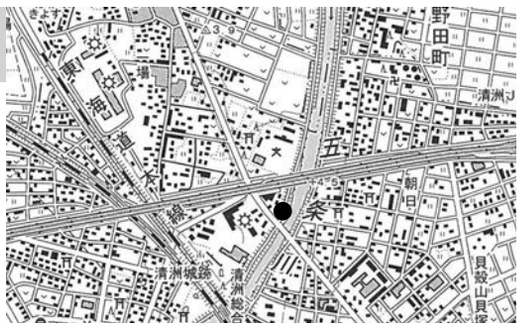
所在地　清須市西田中長堀地内
（北緯35度13分04秒　東経136度51分03秒）

調査理由　新川西部流域下水道事業

調査期間　令和元年12月

調査面積　21㎡

担当者　樋上 昇



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　発掘調査は、新川西部流域下水道工事に伴う事前調査として、愛知県建設局下水道課より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

立地と環境　朝日遺跡は五条川右岸の沖積微高地に立地する。現地表面での標高はおよそ4mを測る。今回の調査区は史跡貝殻山貝塚の西にあたり、弥生時代前期および中期前葉～中葉の環濠集落（中期は南居住域）の西端にあたる。

調査の概要　朝日遺跡の基本土層は、上から現代の盛り土、旧水田耕作土、古墳時代中期の堆積とみられる灰白色シルト層、弥生時代の堆積層である黒褐色シルト層があり、基盤層である灰白色中粒砂層にいたる。しかし、今回の調査では黒褐色シルト層までが完全に撹乱されていたため、最下面の灰白色中粒砂層上面での遺構検出と掘削にとどまった。

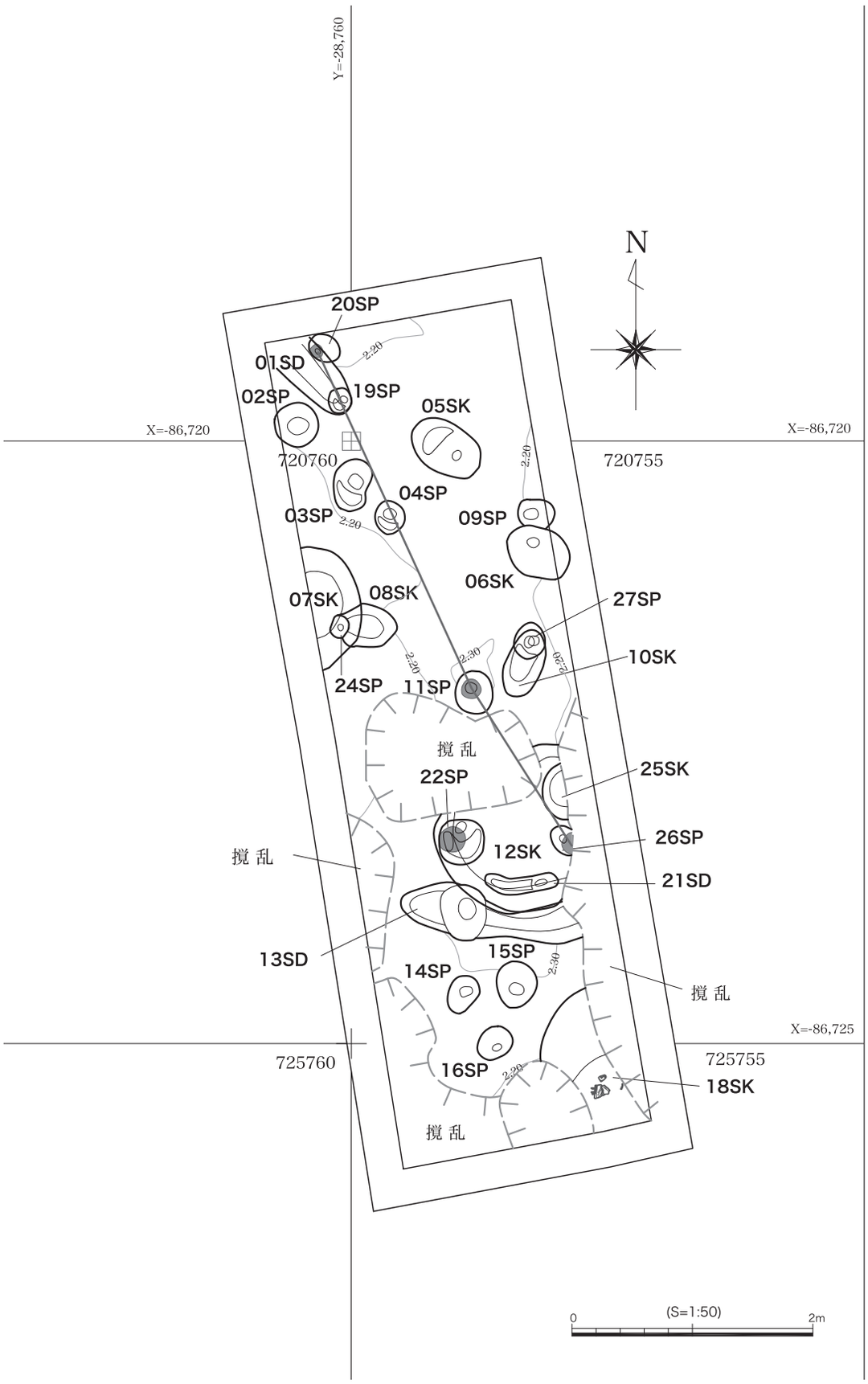
弥生時代前期の土坑07SKのほかは、全て弥生時代中期の遺構と考えられる。うち、調査区南東隅の18SKからは凹線紋系の甕と古井式の壺の破片を確認した。　（樋上　昇）


調査区南半部検出状況（東から）


調査区北半部検出状況（東から）


完掘状況（西から）


18SK土器出土状況（西から）


Y=-28,760
N
X=-86,720
X=-86,720
720760
720755
X=-86,725
725760
725755
20SP
01SD
02SP
19SP
05SK
04SP
03SP
09SP
06SK
07SK
08SK
27SP
10SK
24SP
11SP
攪乱
22SP
25SK
26SP
12SK
21SD
攪乱
13SD
15SP
14SP
攪乱
16SP
18SK
攪乱
2.20
2.30
(S=1:50)
0
2m

遺構全体図（S=1/50）

亀塚（かめづか）遺跡／向田（むかいだ）遺跡（本発掘調査A/B）

所在地　安城市東町・桜井町地内
（北緯34度55分5秒　東経137度5分53秒）

調査理由　中小河川改良事業（鹿乗川）

調査期間　令和２年１月～令和２年３月

調査面積　440㎡

担当者　樋上 昇・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は愛知県建設局河川整備課知立建設事務所による中小河川改良事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて令和２年１月から令和２年３月にかけて実施した。調査対象地の現況は圃場整備を受けた水田であり、近現代の耕作土および床土を除去した検出面より遺構掘削を実施。調査面積は向田遺跡本発掘調査Bが178㎡、亀塚遺跡本発掘調査Bが192㎡、亀塚遺跡本発掘調査Aが70㎡である。

立地と環境　向田遺跡・亀塚遺跡は隣接し、碧海台地の東縁部から沖積低地に広がる鹿乗川流域遺跡群の一部である。調査地は矢作川右岸の氾濫原平野に位置し、旧地形は入り組んだ河道が流れる後背湿地であった。

亀塚遺跡は昭和48年度以降、安城市教育委員会および愛知県埋蔵文化財センターによって調査が実施され、直近の調査は本調査区の南に隣接する愛知県埋蔵文化財センターが行った2016年度の調査となっている。安城市教育委員会が昭和52年度に実施した２次調査で出土した人面文土器はよく知られている。

向田遺跡は、平成12年度に安城市教育委員会によって実施された発掘調査によって存在が明らかとなり、同年度の愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査を経て、平成29年度に発掘調査が実施されている。

調査の概要

亀塚遺跡本発掘調査B　調査は亀塚遺跡本発掘調査Bより着手した。遺構検出面の標高は7.4mで中世の溝（001SD・002SD）、古墳時代前期に埋没したと考えられる河道（003NR）が検出された。001SD、002SD共に古墳時代前期の遺物を多く検出したが、わずかに須恵器甕破片や山茶碗破片を包含することから中世の溝とした。003NRは東西方向の河道で、検出面での幅が約16mである。底面の標高は6.1m。検出された遺物は、完形品を含む古墳時代前期の土器は、器種は壺、甕、高坏が判別できる。木質遺物は加工された建築部材や板材、丸材がある。金属製品では003NR北岸部分で検出された銅鏃2点がある。003NR北岸部に近接して検出された竪穴建物跡（100SI）からも銅鏃1点が出土している。

亀塚遺跡本発掘調査A　亀塚遺跡本発掘調査Aは計12カ所、70㎡を設定した。TT1~TT4では基盤層が標高7.5m前後で検出され、溝や流路の縁辺部がTT1～TT3で検出された。

TT5～TT8では、TT5で柱痕を伴う柱穴2基、土坑1基、TT6、TT7では古墳時代から灰釉陶器や山茶碗破片を含む、厚さ0.2～0.4mの遺物包含層が検出された。これらは中世以降の掘削による再堆積と考えられる。TT8では遺構が標高7.4mで検出され、小土坑14基、溝3条を検出した。遺物包含層の下位やTT5、TT8の検出面以下は今後調査予定である。

向田遺跡本発掘調査B　向田遺跡本発掘調査Bは178㎡の調査区を設定した。調査区北半部には基盤層そのものが存在せず、南端部では土坑2基等を検出した。検出面の標高は6.9mである。（鈴木恵介）



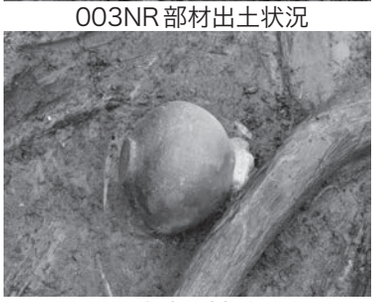
向田遺跡、亀塚遺跡遠景（手前が向田遺跡調査区）



003NR 北岸上層部遺物検出状況



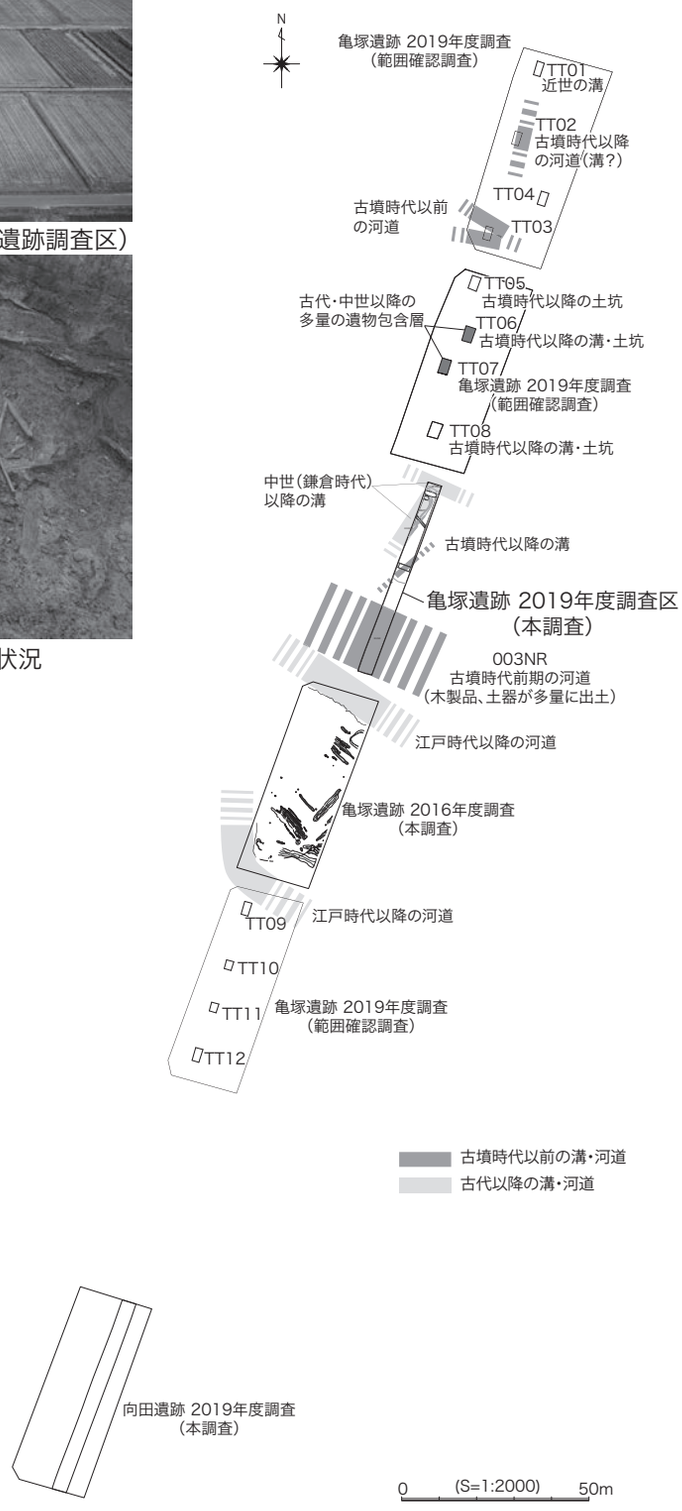
003NR 部材出土状況



003NR 壺（平底）出土状況



003NR 壺（丸底）出土状況



向田遺跡 亀塚遺跡2019年度調査区配置図（S=1/2,000）

万瀬（まんぜ）遺跡（本発掘調査B）

所在地　北設楽郡設楽町川向字マンゼ
（北緯35度06分43秒　東経137度33分54秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　令和元年6月～令和2年1月

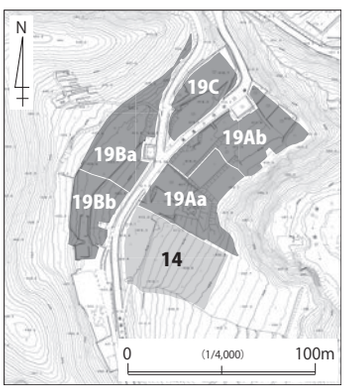
調査面積　8,200㎡

担当者　酒井俊彦・川添和暁・河嶋優輝



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、令和元年６月から令和２年1月にかけて実施した。調査面積は8,200㎡で、19Aa区・19Ab区・19Ba区・19Bb区・19C区の5区に分けて調査を行った。



万瀬遺跡調査区位置図

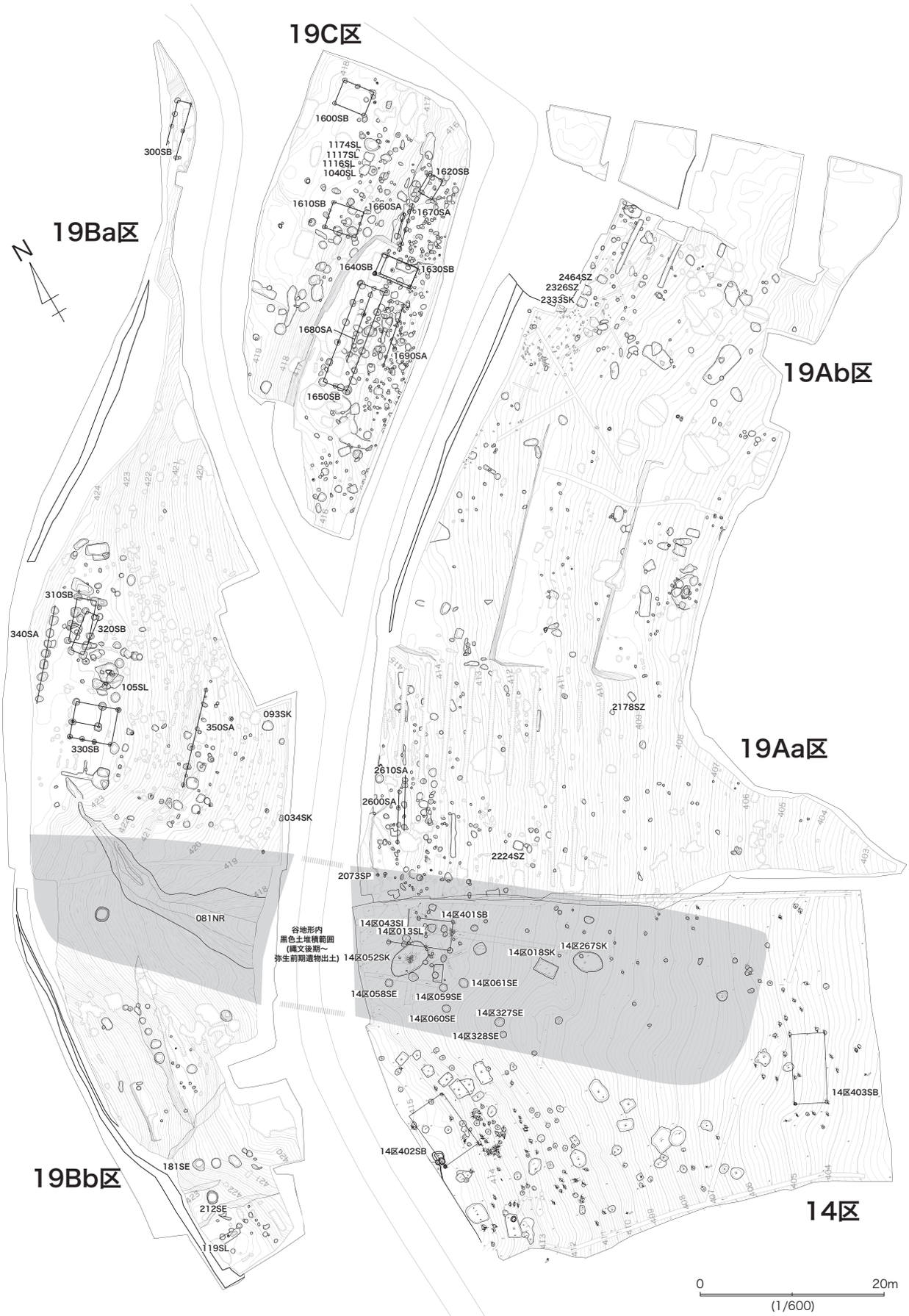
立地と環境　遺跡は、境川に東面する、丘陵末端の緩斜面上に立地する。当地は大畑遺跡の立地する岬状した丘陵の付け根北東側奥部に位置しており、その反対側の南西側奥部には大栗遺跡が位置する。標高は、遺跡範囲中央に横走する県道を挟んで、410～425mを測る。この丘陵自体は片麻岩由来の岩盤によるもので、地形の凹地には第三紀以前の風化による均質な粘土層の形成が所々で認められた。

調査の概要　基本層序は、上から、第1層：表土および近代以降の盛土・耕作土、第２層：中世から近世の黒色土、第３層：縄文時代早期前半以前のにぶい灰黄褐色粘土を主体とする遺物包含層、第４層：黄褐色粘土および礫層（地山）、であった。調査区内は概ね西側（山側）から東側（境川側）に向かっての緩傾斜地ではあるものの、西側から東側に向かって幾筋もの谷地形が刻まれており、それを挟んだ高まりごとに土地利用のあり方に相違が認められる。

確認された、遺構・遺物は下表の通りである。

時代・時期	確認調査区	検出遺構	出土遺物	備考
縄文時代草創期1	Ab区		有舌尖頭器・木葉形尖頭器	狩り場か。
縄文時代草創期2	Ab区	土器横位出土遺構1	表裏縄文土器	当地での活動形成の始まり。
縄文時代早期前半	Aa区・Ab区・C区	竪穴建物跡6、炉穴4、集石炉跡4、遺物包含層（捨て場）	押型文土器・撚糸文土器・石鏃・礫器・剥片石核類・磨石敲石類・石皿台石類	縄文時代集落形成の主体時期。地形と遺構群との関係が良好に分かる。
古墳時代前期	Ba区	土坑1	甕・高坏	
中世～近世	Aa区・Ab区・Ba区・Bb区・C区	掘立柱建物跡約10、柵列、焼土遺構、井戸、土坑墓4、その他土坑・ピット多数	陶器（山茶碗・摺鉢・天目茶碗・水滴・その他近世陶器）、土師鍋（伊勢型・内耳）、砥石、銅銭（寛永通宝）・キセル・火打金・鉄滓	倉庫と考えられる大型の掘立柱建物跡の確認。『設楽町誌』記載の郷倉とお堂に対応する建物跡を確認。
近世以降	Ba区・Bb区	谷地形内遺物堆積	土器（深鉢・注口土器）、石鏃・打製石斧・礫器・剥片・磨製石斧・近世陶器	出土遺物は、縄文時代後期～弥生時代前期主体で、近世陶器が混じる。

以下、中世以降と縄文時代～古墳時代とに分けて調査概要を報告する。なお、近世以降に形成された谷地形埋土は、出土遺物としては縄文時代後期から弥生時代前期に属するものが多いため、縄文時代の中で扱うこととする。　（川添和暁）



万瀬遺跡遺構位置図 古墳時代以降中心 (S=1/600)

中世以降　中世以降の主な遺構として、掘立柱建物跡10棟、柵列跡8条、井戸跡2基、土坑墓4基、炉跡3箇所が挙げられる。

掘立柱建物跡　掘立柱建物跡は19Ba区で4棟、19C区で6棟を確認した。300SBは桁行4間、梁間1間以上、規模6.0m×3.0m以上の掘立柱建物跡である。ピット005SP・007SPでは掘り方内の北西側に大礫を配しており、柱の支えとして据えたものと思われる。310SBは桁行3間、梁間1間、規模4.9m×2.1mの掘立柱建物跡である。320SBと重複するが、ピットの掘り方に切り合いがなく、前後関係は不明である。320SBは桁行2間、梁間1間、規模4.5m×1.5mの掘立柱建物跡である。『設楽町誌　村落誌』(北設楽郡設楽町 2003)掲載の村落略地図には当遺構の付近に「蔵」「堂」の表記が見られ、建物の形態から310・320SBは蔵に相当するものと考えられる。ピット036SKで種別は不明であるが銭貨が出土する。330SB は桁行3間、梁間２間、規模4.6m×3.9mの掘立柱建物跡である。ピット051・052・053・054 SPの掘り方は同建物跡の他のものより大きく、この4基が建物の本体を構成し、他は廂等を構成したものと考えられる。ピット076SPでは柱痕の平面形が方形であることが確認された。建物の形態から、村落略地図の堂に相当するものと考えられる。310・320・330SBは、周辺で出土する陶器・磁器類から18世紀後半～19世紀のものと考えられる。

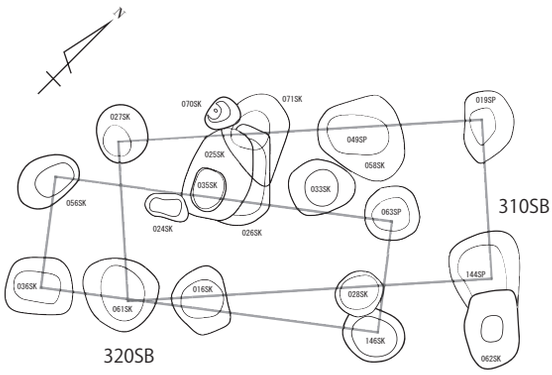
19C区で確認された6棟の掘立柱建物跡のうち、1600SB・1610SB・1620SB・1630SB・1640SBの5棟は規模約2.1～5.5mで住居としての利用が想定される。周辺の出土遺物の時期は15世紀後半から19世紀に渡り、中世から近世にかけて存続した集落跡と考えられる。1630SBは1640SBと重なっており、1640SBをほぼ同じ位置で建て替える際に桁行を2間に変更して規模を若干拡大したものと考えられる。1650SB は桁行5間、梁間1間、規模11.5m×2.8mの掘立柱建物跡である。ピット1262SPでは柱痕跡が方形であることが確認された。ピット1263SPで17世紀後半の遺物が出土し、1263SPに切られる土坑1265SKで15世紀後半の遺物が出土することから、1650SBは15世紀後半以後に建造され、17世紀後半から18世紀に廃絶したものと考えられる。

柵列跡　19Ba区では2条の柵列跡、19C区では4条、19Aa区では2条の柵列跡を確認した。19C区の1680SAは1650SBと重なる位置であり、主軸方向も1650SBとほぼ一致するが、柱筋が通らないため独立した柵列跡とした。

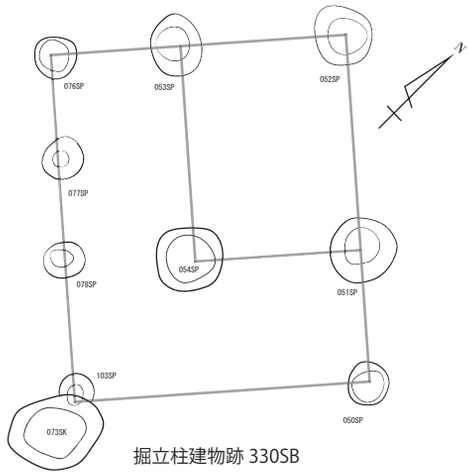
井戸跡　212SEは19Bb区南側、谷地形の肩部付近に位置する井戸跡である。掘り方内に上部は縦板、下部は礫積みで枠を構成し、最下部には加工した丸太材を組む構造で、掘り方は直径1.0～1.1mの円形でほぼ垂直に落ち込む。181SEは谷地形の内部に位置する土坑で、素掘りの井戸跡と考えられる。

土坑墓　2178SZは隅丸方形の平面プランを持つ土坑墓であり、埋土から銅銭5枚が出土した。2224SZはやや胴張りのある隅丸方形の平面プランを持つ土坑墓であり、埋土から銅銭13枚、キセル1本以上のほか、骨片が出土した。以上2基に加え、近代以降の掘削と考えられる2465SDでは銭貨6枚、キセル1本が出土し、墓坑を破壊して溝が掘り込まれたものと思われる。

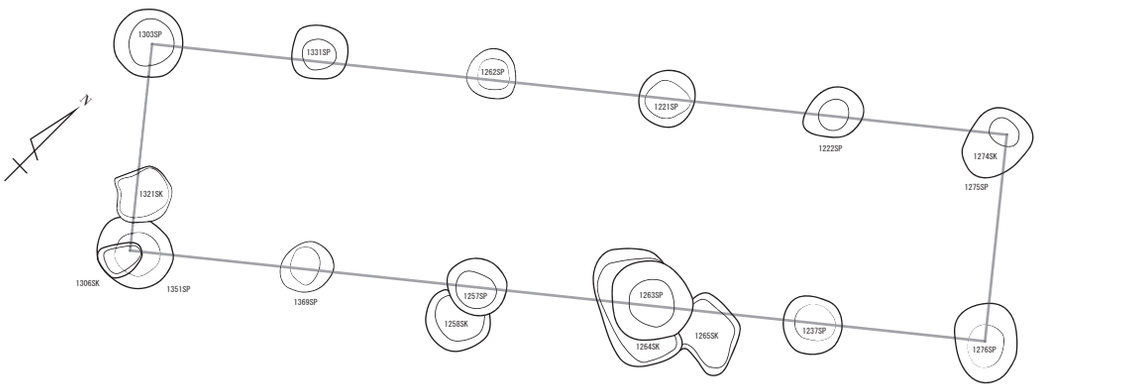
炉跡　105SLは3.2m四方ほどの範囲で6度にわたって利用された炉跡であり、遺構埋土内には陶器・磁器片のほか、炭化物と被熱した大礫が多く含まれる。199SLは幅0.8m、長さ2.3m以上の溝状の炉跡である。1040・1116・1117・1174SLは1610SBの北東方に位置する炉跡群で、隅丸方形あるいは円形の炉跡が4基連続する。



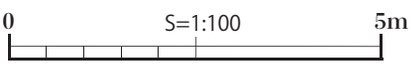
掘立柱建物跡 310SB・320SB

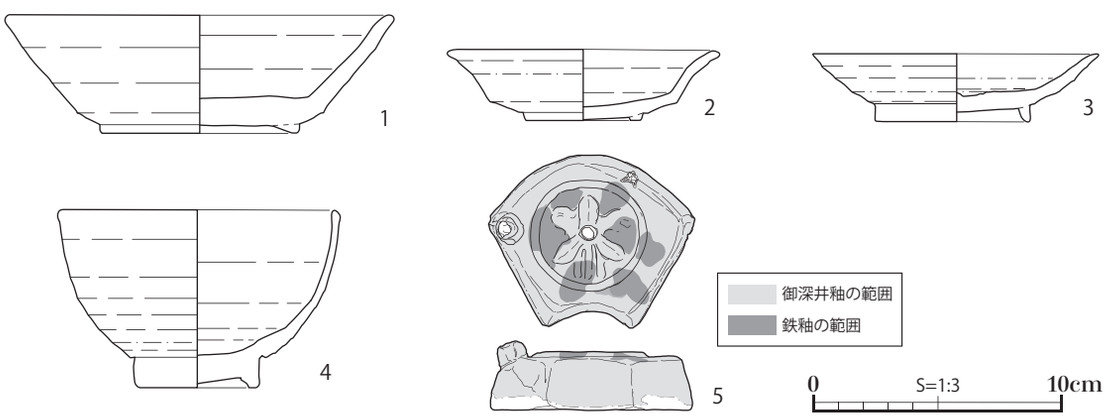


掘立柱建物跡 330SB



掘立柱建物跡 1650SB





万瀬遺跡　中世以降の遺構・遺物

出土遺物　今年度調査における中近世遺物の多くは19B区から19C区にかけて出土し、特に掘立柱建物跡周辺に多い。それに対して19A区からの出土は少数にとどまる。中世に属する遺物としては山茶碗、伊勢型鍋、擂鉢、腰折皿、平碗、端反皿、内耳鍋などが挙げられ、19C区に多く、19B区ではごく少数である。近世に属する遺物としては天目茶碗、皿、端反碗、広東碗、鎧茶碗、腰錆碗、擂鉢、水滴、銅銭、キセルなどが挙げられる。銅銭のうち文字を確認できたものは全て寛永通宝である。

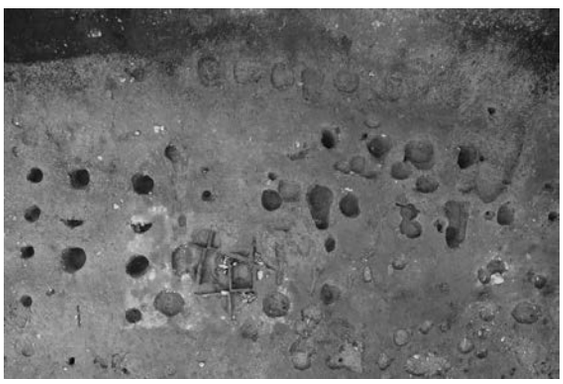
中世以降の遺物で全体が復元できたものの一部を掲載する。1は034SK出土の渥美湖西型山茶碗。復元口縁部径15.6cm、高台径8.0cm、器高4.7cm、13世紀中葉。2は1265SK出土の灰釉腰折皿である。復元口縁部径10.9cm、復元高台径4.9cm、器高2.8cm、15世紀後半。3は19B区表土出土の皿である。復元口縁部径11.5cm、高台径6.3cm、器高2.7cm、18世紀代。4は1263SP出土の丸椀である。復元口縁部径11.3cm、高台径5.0cm、器高7.1cm、17世紀後半から18世紀。5は212SE出土の水滴である。底幅8.3cm×6.3cm、器高2.8cm、扇面形で御深井釉の掛かる上面には丸に立ち沢瀉の意匠。17世紀後半。　(河嶋優輝)

古墳時代

19Ba区093SKからは、古墳時代初頭の甕・高坏片が出土した。大栗遺跡でも同時期の土器片が採取されており、今後も近隣で当該時期の活動痕跡が見つかる可能性がある。

谷地形内堆積物

19Ba区と19Bb区の境付近には谷地形が検出され、黒色の埋土中からは縄文時代後期中葉から弥生時代前期の土器片や石器がまとまって出土した。この黒色土からは若干ではあるが近世陶器片も出土し、かつ14区では中世以降の遺構を覆っていたものである。従って



Ba区 310SB・320SB・330SBと105SL(上が西)



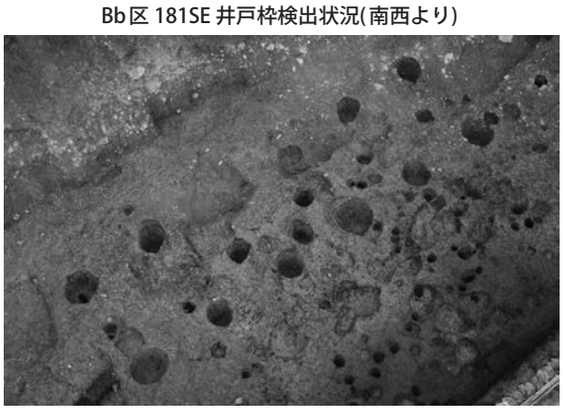
Ba区 105SL 充填された礫検出状況(東より)



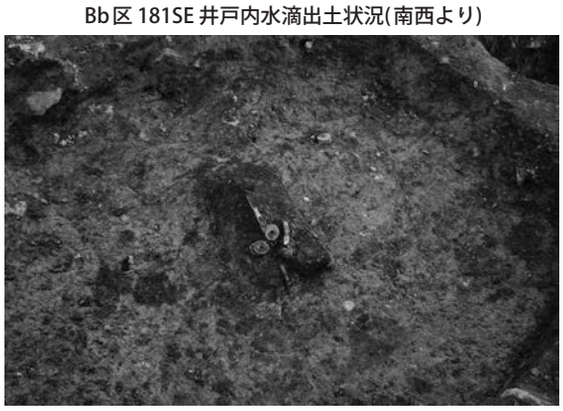
Bb区 181SE 井戸枠検出状況(南西より)



Bb区 181SE 井戸内水滴出土状況(南西より)



C区 1650SB(上が北西)



Aa区 2224SZ 銅銭・キセルなど出土状況(南西より)

この黒色土の堆積は近世以降と考えられ、縄文・弥生時代の遺物は、周囲からの二次的な混入である可能性が高いと考えられる。

縄文時代早期前半の集落跡

遺跡範囲の北側、19Aa区・Ab区・C区にまたがる50×60mの範囲では、縄文時代早期前半を主体とする集落跡が見つかった。検出された遺構は、炉穴4基（1572SL・2116SL・2127SL・2445SL）、集石炉跡4基（2400SL・2447SL・2448SL・2449SL）、竪穴建物跡6基（1700SI・1710SI・1720SI・1730SI・1740SI・2460SI）と、捨て場と考えられる遺物包含層（2500SX）である。遺物包含層は径1cm弱の礫を多く含むにぶい灰黄褐色粘土層で、道路を挟んで19C区と19Ab区を挟んだ範囲で良好な状態で検出された。包含層の斜面上方に当たる19C区東端では、重複をした状態で竪穴建物跡が計5基見つかった。いずれも径4～5mほどの多角形を呈する平面プランで、皿状の底面を有する。中央には炉跡は認められないものの、建物跡底面や縁にはピットが複数認められた。ここでは先行する竪穴建物跡がある程度埋没してから、次の竪穴建物跡が構築された様子を確認することができた。

竪穴建物跡の重複

炉穴

炉穴は平面プラン長楕円形を呈するものが多く、長軸1～2m弱・短軸0.6～0.8mほどの法量を有する。機能時の被熱部分および埋土の状況などから、いずれも複数段階での機能面が確認されている。2127SLは元来はトンネル構造を持つ煙道付炉穴であったと考えられるが、その後板石を入れるなどして構造を改変してさらに繰り返し利用された様子を確認することができた。

集石炉跡

集石炉跡は4基確認したが、いずれも竪穴建物跡2460SIの埋土内であった。2460SIの建物跡としての利用が終了して、ある程度埋没した凹地状のところに、炉跡としての使用が繰り返し行われたと考えられる。炉跡はいずれも長径0.6～0.8m程度の浅い凹地状を呈するもので、焼土・炭化物を多く含んでいた。

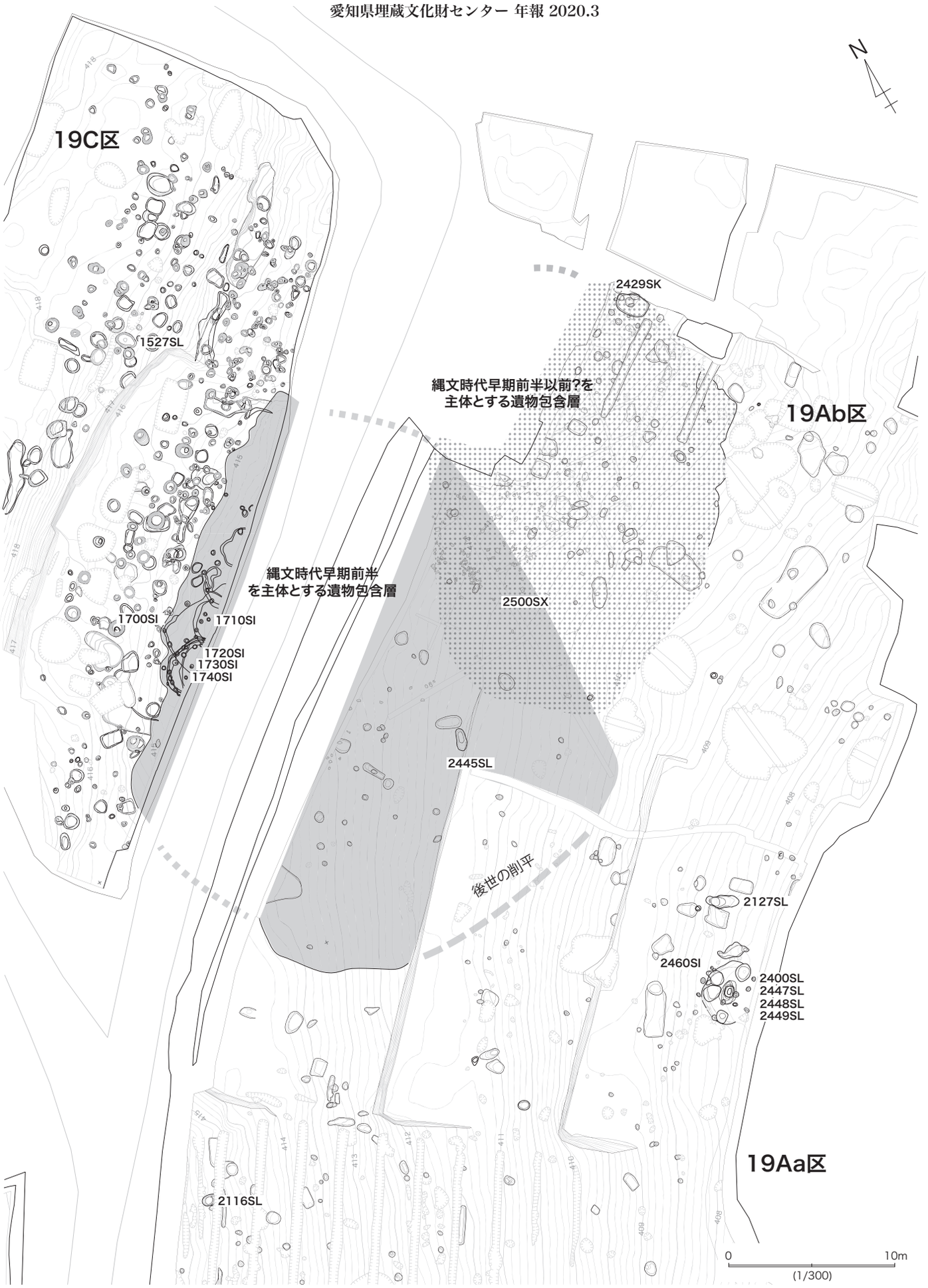
捨て場

谷地形内では、土器・石器を多く含む堆積層を確認した。にぶい灰黄褐色粘土層の分布する北東端が、谷地形としては最も深い部分に当たる。ここからは上に記した遺構同様に、早期前半の押型文土器が出土する。包含層内には、径20cm程度の角礫が固まっている場所があり、人為的な利用後に廃棄された可能性が考えられる。谷地形では、礫を多く含むにぶい灰黄褐色粘土層の下に、礫を含まない褐色粘土層の堆積があり、その範囲は谷地形対岸の北側に向かって広がっていた。この堆積土からは、押型文土器の出土もあるものの、多縄文系土器の出土も認められた。

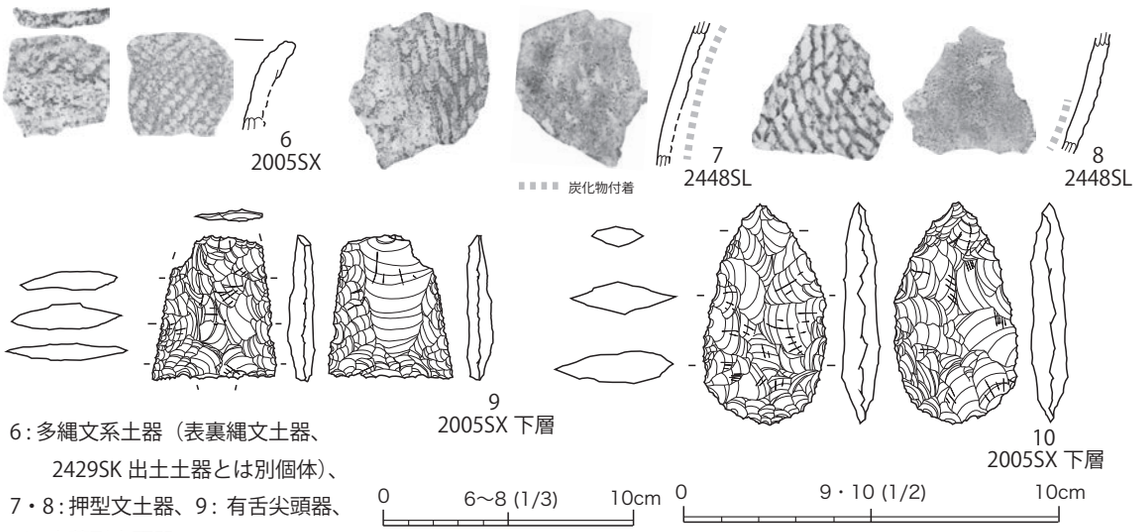
礫を含まない褐色粘土層の堆積が展開する北端からは、注目すべき遺構が見つかった。2449SKは2.0×1.2mを測る浅い凹地であり、もともとは古い段階の倒木痕由来の凹地が存在していた場所であったと考えられる。その凹地内から、表裏縄文土器が一個体分、横位の潰れた状態で出土した。底部は見当たらないものの、口縁部から胴部下半まで良好に残存していた。現在、接合・復元作業が行っていない状況であるが、器壁が5mm程度と薄手で、器形などから、草創期に遡りうる可能性が考えられるものである。万瀬遺跡の縄文時代集落跡には、他にもこの時期まで遡る遺構が見つかる可能性があろう。

出土遺物

出土遺物は、早期前半の大川式をはじめとする押型文土器や撚糸文土器も見つかっている。2449SK出土土器の様に多縄文系土器群のなかには草創期末まで遡りうるものもあるかもしれない。石器には、石鏃・礫器・剥片石核類・磨石敲石類・石皿台石類の出土があった。また、2500SXの下層からは、縄文時代草創期に属する有舌尖頭器と木葉形尖頭器がそれぞれ1点ずつ出土した。川向東貝津遺跡に近い当地は、これら尖頭器が使われた時期は、狩猟の場として利用されていたものと考えられる。（川添和暁）



万瀬遺跡遺構位置図 縄文時代早期前半中心（S=1/300）



6 : 多縄文系土器（表裏縄文土器、
2429SK 出土土器とは別個体）、
7・8 : 押型文土器、9 : 有舌尖頭器、
10 : 木葉形尖頭器

万瀬遺跡 縄文時代早期前半以前の出土遺物



C区 1700SI完掘および1710SI・1720SI検出（南西より）



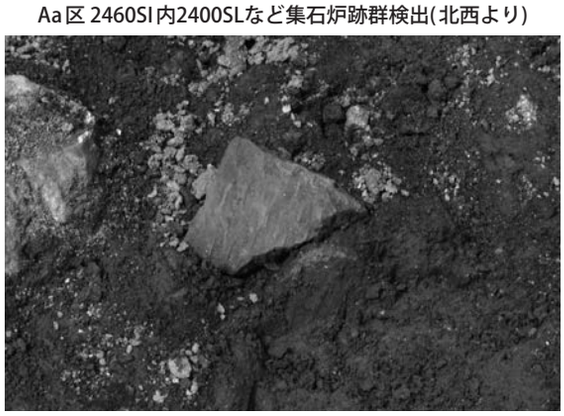
C区 竪穴建物跡群完掘削状況と東壁（南西より）



Aa区 2460SI内2400SLなど集石炉跡群検出（北西より）



Aa区 2127SL 土層断面（南より）



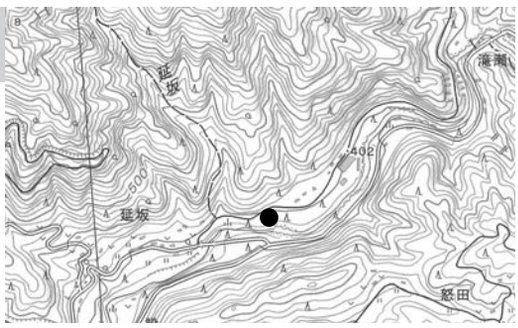
C区 1527SL 押型文土器出土状況（南東より）



Ab区 2429SK表裏縄文土器出土状況（北東より）

石原（いしはら）遺跡（本発掘調査B）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分55秒 東経137度34分22秒）
調査理由　設楽ダム
調査期間　令和元年5月～令和元年11月
調査面積　6,800㎡
担当者　酒井俊彦・武部真木・田中良



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　石原遺跡は、豊川上流の境川右岸に所在する（川向地区）。石原遺跡とその周辺では、主に境川右岸に発達した河岸段丘および沖積地からなる平坦面や緩斜面が分布しており、やや開けた谷地形となっている。上流部の左岸域に立地するマサノ沢遺跡では、平成29年度の発掘調査でハート形土偶が出土している。石原遺跡は、隣接する下延坂遺跡とともにマサノ沢遺跡の対岸に位置し、その範囲は、標高394～403mの緩斜面を中心に一部は北側の斜面（標高405～418m）にも及んでいる。これらの遺跡は、平成28年度に当センターによって範囲確認調査が行われている。

調査の概要　今年度は、町道より北側の19A区、町道より南側の19B区、その南西の19C区にて調査を実施した。19A区と19B区では、上位の山からの何層にも及ぶ大規模な土石流を検出した。19C区では、境川寄りの低い谷地形から縄文時代後期末から弥生時代前期までの遺物包含層を検出した。

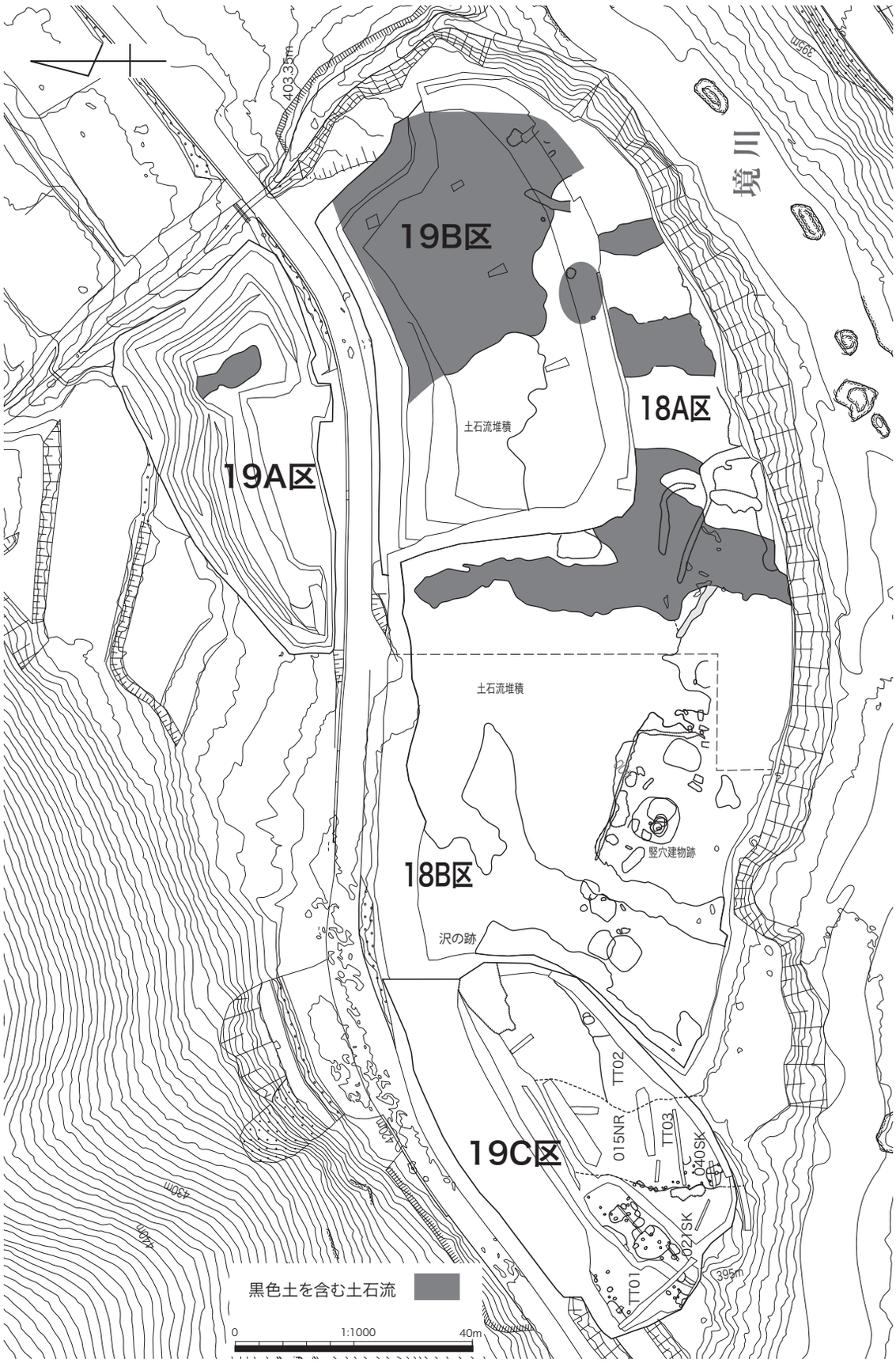
19A区　19A区は幾重にも重なる土石流が調査区全体を覆っており、東側では層の厚さが1m以上で、直径1m以上の巨礫が含まれる大規模な土石流が確認された。それらの土石流の下層からは、摩滅した縄文土器片や石鏃などが見つかった。

19B区　19B区は、砂層が19A区と同様の土石流に覆われている。その土石流が比較的薄い南側では、砂層が堆積している部分で、一部沈鉄混じりの二次堆積と思われる黒色土が堆積しており、そこから摩滅した縄文土器片や数点の黒曜石を含む剥片などが合わせて30点余り出土している。

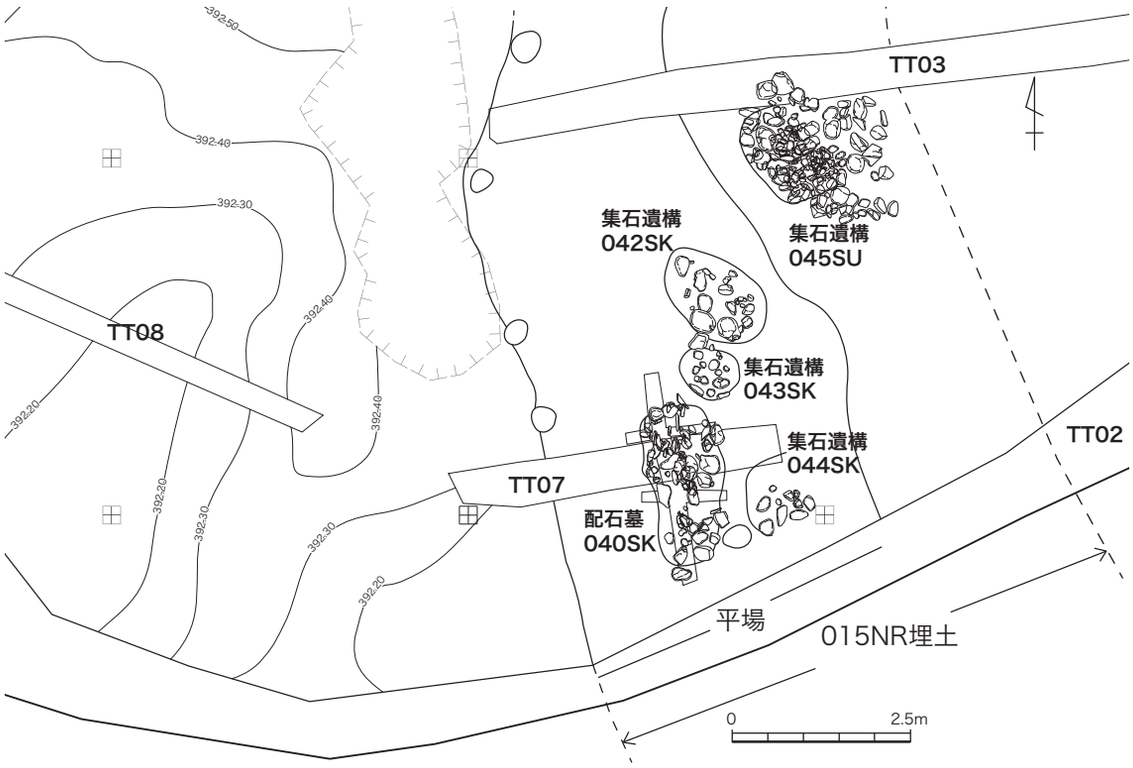
19C区　19C区は、土石流と造成により、上・中段が大きく土地改変が行われている。その改変が及んでいない下段では縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての谷地形と黒色土の遺物包含層と配石墓などの遺構が検出された。

021SK　土坑(021SK)は、長さ2.35m幅1.45m深さ0.55mである。この土坑からは、摩滅した土器片や石鏃、剥片などが10点ほど出土し、黒曜石製のものが半数を占める。中段の遺構としては多くの遺物が出土している。

015NR　谷地形(015NR)は、縄文時代後期末から縄文時代晩期の包含層(黒色土)と、縄文時代晩期から弥生時代前期の包含層(暗褐色土)が堆積している。谷地形の大きさは、南北約20m、東西約15mとなるが、半分以上が土石流によって壊されており、黒色土と暗褐色土の遺物包含層が良好に残っている範囲は右岸域長さ約7~8mの範囲である。この谷地形からは、煤の付着した土器片が大量に出土しており、そのほとんどが煮炊きに使用されたと考え



遺跡全体図（S=1/1,000）



谷地形015NRとその周囲の遺構(S=1/50)



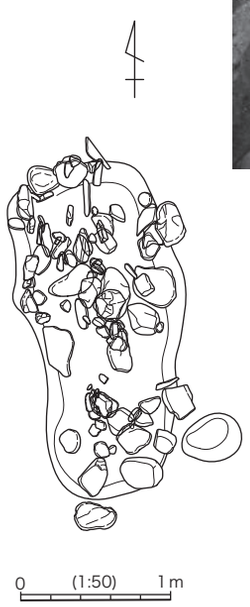
北側の掘り方(西から)



040SK検出状況(東から)



北西側の掘り方土器出土状況(西から)





040SK完掘状況(北から)

配石墓040SK(S=1/50)

られる。また、土器の出土傾向から、トレンチ(TT03)の辺りを境いに上流域部に弥生時代前期の条痕文土器が多く、それより下流域部ではほとんど出土していない。縄文時代晩期後葉の突帯文土器は015NRに広く分布しており、全体の土器の半分以上の割合を示す。縄文時代晩期中葉以前の土器は、ほとんどが下流域部で出土しており、配石墓（040SK）の掘り方には縄文時代晩期初頭以前の包含層が残っていた。このことから、包含層が形成される過程にも時期差があることが判明した。015NRの包含層が形成される以前の状況は、平場となっており土坑が数基掘り込まれているが、積極的な利用はされていない。周辺の遺構の状況から考えると、土器の廃絶が一時的に止まった段階で、配石墓040SKや集石遺構042SK、043SK、044SK、045SUが構築され、煮炊きなどが集中的におこなわれ、再び廃棄が継続したと思われる。集中的に煮炊きなどで利用していた時期は、土器の出土量から縄文時代晩期後葉と考えられる。

出土した石器は、打製石斧や磨製石斧、礫器、磨石、敲石、台石などの加工具が多く、石鏃は10点以下と少ない。このような石器組成の偏りからは、植物質食料を積極的に利用していたことが伺える。この点は、土器の内面に付着した煤の分析と合わせて検討することで、当時の人々の食性やこの地で何を煮炊きしていたのかより明らかになると思われる。

040SK　配石墓(040SK)は、石が縦向きに2列配石されており、埋土に骨片や骨粉を含んでいることから配石墓であると考えている。長さ2.45m幅1.1mで、縄文時代晩期初頭の土器を含む包含層を掘り込んで構築され、埋土中から突帯文土器が出土していることから、縄文時代晩期後葉以降のものと考えられる。

042SK
043SK
044SK　集石遺構とした(042SK・043SK・044SK)は、被熱した礫を含んでいる。015NRの埋土(黒色土)中に構築されており、掘り方が確認出来なかった。黒色土中には片麻岩の亜角礫や亜円礫が多く含まれているため、人為的な遺構ではない可能性もあるが、被熱した礫や安山岩が構成礫に含まれているため、集石遺構と考えている。掘り方が不明瞭であるのは、黒色土が堆積していく過程で、掘り込まず、地面に配置したためだと考えている。出土している土器と共に煮炊きに利用されたと考えられる。

045SU　045SUは042SK・043SK・044SKと同様、被熱した礫を含む集石遺構と考えられる。辺り一面に礫が堆積しているが、045SUに棒状の亜角礫や被熱した礫が含まれていたため、一つの集石遺構として捉えた。045SUを構築する礫は、他の集石遺構よりも大きな礫が利用されている。

ま と め

今回の調査では、昨年度とは異なる時代の遺構や遺物が検出された。中でも、昨年度調査区の18B区は、縄文時代中期前半の竪穴建物跡とそれに伴う遺物が出土していたが、隣接する19C区ではそれよりも新しい、縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての遺構や遺物が検出された。この全く異なる時代の遺跡が展開していたことは、当時の人々の生活環境を考察する上で、重要な事例となるであろう。また、19C区の谷地形(015NR)は、縄文時代後期末から弥生時代前期にかけて形成されているため、当時の人々がこの近辺に継続して居住していた可能性が高い。土器の廃棄量から推察して、あまり遠くない場所に集落が形成されていたと考えられるため、今後の調査で発見されることが期待される。

(田中　良)



石原遺跡全景(19A区調査時)



19A区全景（南東から）



19B区全景（南から）



19B区南壁（北から）



19C区全景（東から）



谷地形015NR黒色土検出状況（南から）



谷地形015NR土層断面TT03（南西から）



谷地形015NR遺物出土状況（北から）



040SK完掘状況（南東から）



042・043SK検出状況（東から）



044SK検出状況（東から）

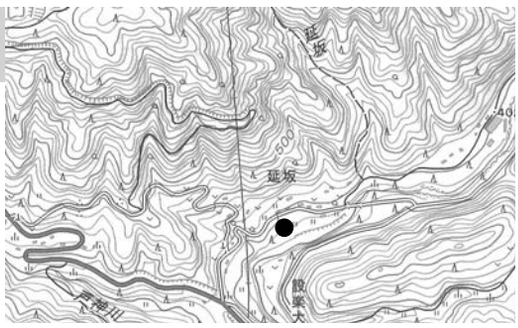


045SU検出状況（西から）



谷地形015NR完掘状況（東から）

上ヲロウ（かみ）・下ヲロウ（しも）遺跡（本発掘調査B）



調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分50秒 東経137度34分03秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　令和元年5月～令和元年9月

調査面積　3,600㎡

担当者　酒井俊彦・永井宏幸・宮腰健司

調査の経過　本年度の発掘調査は、平成28年度本発掘調査A（範囲確認調査）の成果を踏まえて設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

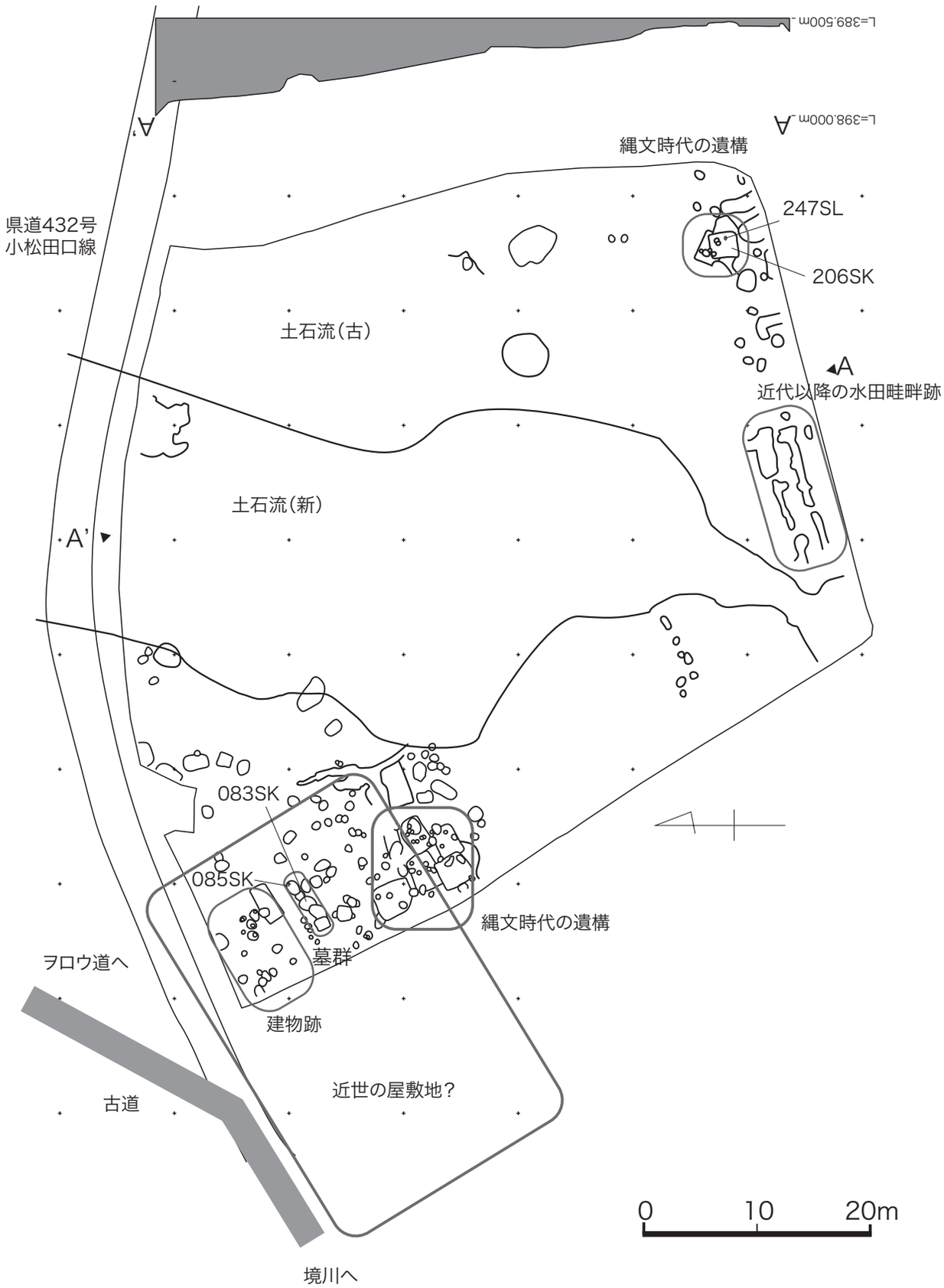
立地と環境　遺跡は、豊川水系境川右岸の河岸段丘から山地へ上がる緩斜面に立地する。今回の調査区での比高差は8.5mある。隣接する周辺の遺跡としては、遺跡の上流に石原遺跡、下流に万瀬遺跡、境川を挟んで対岸に笹平遺跡がある。今年度の発掘調査は、遺跡の中央を横断する県道432号小松田口線の南側境川寄りを行った。

調査の概要　遺跡の現況は、農地として利用されていた。片麻岩を高いところでは２ｍ以上積み、緩斜面に数段の平坦面が造成されていた。この造成に関わる表土を除去すると調査区中央におびただしい砂礫層を含む土石流が展開する。土石流の時期は限定できないが、土石流の影響の及ばないところに縄文時代晩期を中心とする遺構群、江戸時代後半の遺構群が確認された。

江戸時代後半の屋敷地と考えられる遺構は、調査区北西寄りに展開し、県道に隣接して建物跡と思われる柱穴を５基以上確認した。柱間を推定できるような配置は確認できなかったものの、建物跡を構成する柱穴に、柱痕跡を断面確認した遺構が５基程度あった。これら柱穴の南側を東西方向に並列し、１ｍ四方、深さ0.5m前後の不定形な土坑を５基確認した。これらのうち、東端の土坑085SKから広東碗と煙管、中央の土坑083SKから皮革で包んだ煙管が出土した。土坑群のうち２ヶ所から副葬品に相応しい遺物が出土したことと、座葬を想定できる土坑の規模であったことから、人骨などは確認できなかったが墓壙と考えられる。また、これら江戸時代の遺構群の南東隅に逆Ｌ字状の溝を確認した。おそらく屋敷地を囲む溝として配置されていたと思われる。なお、この溝の上位には拳大前後の礫が埋設されていた。江戸時代の遺構群は、県道を挟んで遺跡の南西から北西に向かって延びる道が元文元（1736）年作成の川向村絵図に記載されており、この道沿いの屋敷地と考えられる。

江戸時代の遺構群に南接して2m四方前後の方形遺構を５基程度確認した。出土遺物は縄文時代中期から晩期、弥生前期におよぶ土器、石器がある。遺構は明確に輪郭が確認できたものの、掘りかたは不明瞭であった。その理由としては、遺構埋土の土質が基盤層と明瞭に分層できなかったことにある。

調査区南東寄りに縄文時代晩期を中心とする2～３ｍ前後の方形遺構を５基前後確認した。調査区北西寄りの方形遺構群とは異なり、複雑に重なって確認された。全てが竪穴建物かは確定できなかったが、プランのほぼ中央に焼土と炭化物を伴う石囲炉247SLを付設する206SKは、長軸2.9m、短軸1.8mを測る方形の竪穴建物である。　（永井宏幸）


L=389.500m
A
L=398.000m
A'
縄文時代の遺構
247SL
206SK
県道432号
小松田口線
土石流(古)
A
近代以降の水田畦畔跡
土石流(新)
A'
083SK
085SK
縄文時代の遺構
墓群
ヲロウ道へ
建物跡
近世の屋敷地?
古道
0
10
20m
境川へ

遺構全体図 (S=1/500)

大空前遺跡（本発掘調査A）

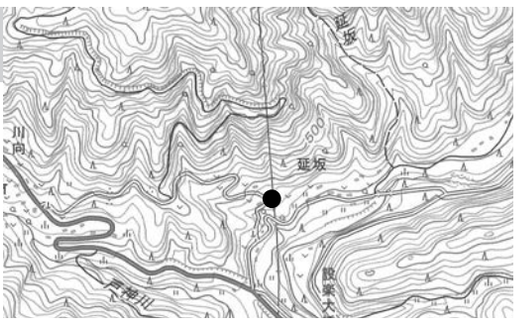
所 在 地 北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分51秒 東経137度33分52秒）

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和元年５月

調査面積 80㎡

担 当 者 酒井俊彦・永井宏幸・宮腰健司



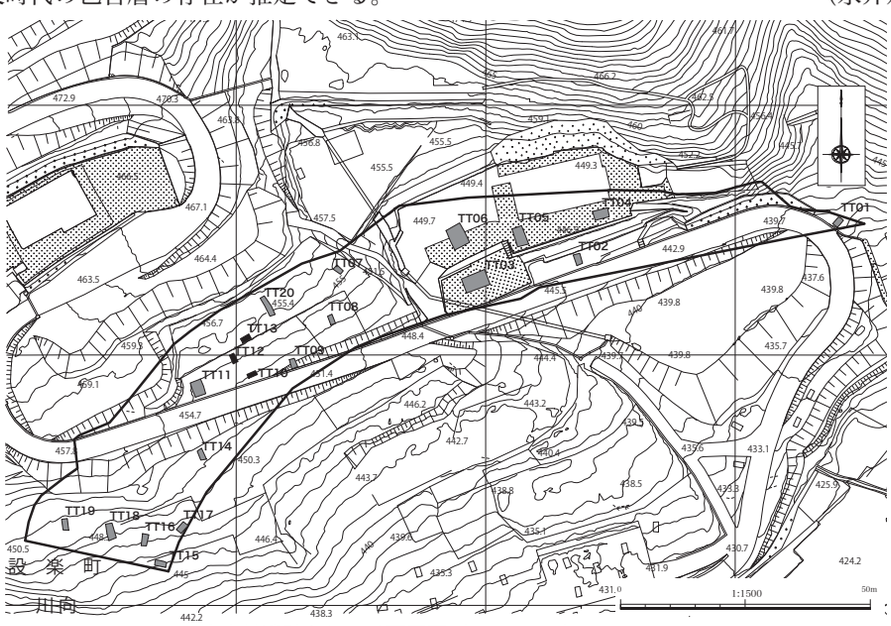
調査地点（1/2.5万「田口」）

立地と環境　遺跡の標高は430～488mで、斜面地に立地する。遺跡の南西端には万瀬遺跡との間に沢がはいる。また、遺跡のほぼ中央と東端にも沢がみとめられ、東端の沢は上ヲロウ・下ヲロウ遺跡へと続く。

調査の概要　大空前遺跡の本発掘調査Aは、平成28年度にダムの湛水域である標高437mまでの範囲を実施している。今回の調査は湛水域より上位に予定されている県道建設予定地にあたる。調査対象地は地形から大きく４つに区分できる。遺跡の東端の沢辺り（TT01）、中央の沢東側（TT02～06）、中央の沢西側の茶畑付近（TT07～13・20）、町道の南側（TT14～19）である。

中央の沢西側の茶畑付近（TT07～13・20）は大規模な造成による改変が認められなかった地区である。特にTT10・12・13は黒褐色砂質シルトが堆積し、下位に堆積する暗褐色シルト層とともに安定した層序が認められた。TT10からは縄文土器、TT12からは縄文土器と打製石斧が出土した。

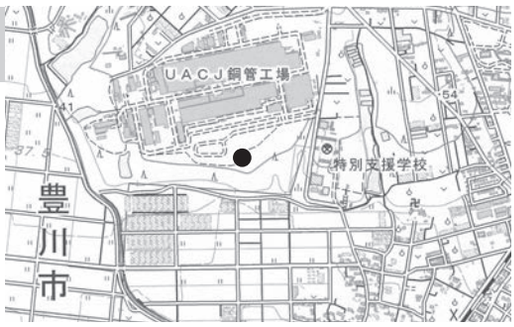
今回のトレンチ調査によって中央の沢西側の茶畑付近以外の地区では、町道による造成および宅地造成、さらに土石流などによる沢の形成により、地形の改変が進み、遺物を含む包含層が削平されている。一方、包含層が認められたTT10・12・13の３ヶ所を中心に暗褐色シルト層および黒褐色砂質シルト層が堆積し縄文時代の石器・土器が出土し、縄文時代の包含層の存在が推定できる。（永井宏幸）



大空前遺跡トレンチ配置図（S=1/1,500）

花ノ木（はなのき）古墳群（本発掘調査A）

所在地 豊川市大木町地内
（北緯34度51分32秒　東経137度24分41秒）
調査理由 道路改良工事（一般国道151号一宮BP）
調査期間 令和元年5月～6月
調査面積 60㎡
担当者 樋上 昇・早野浩二



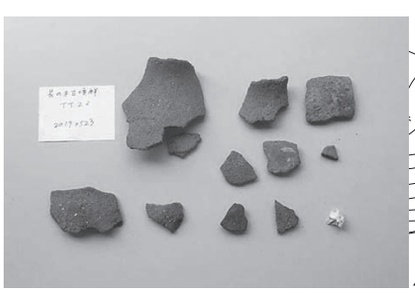
調査地点（1/2.5万「新城」）

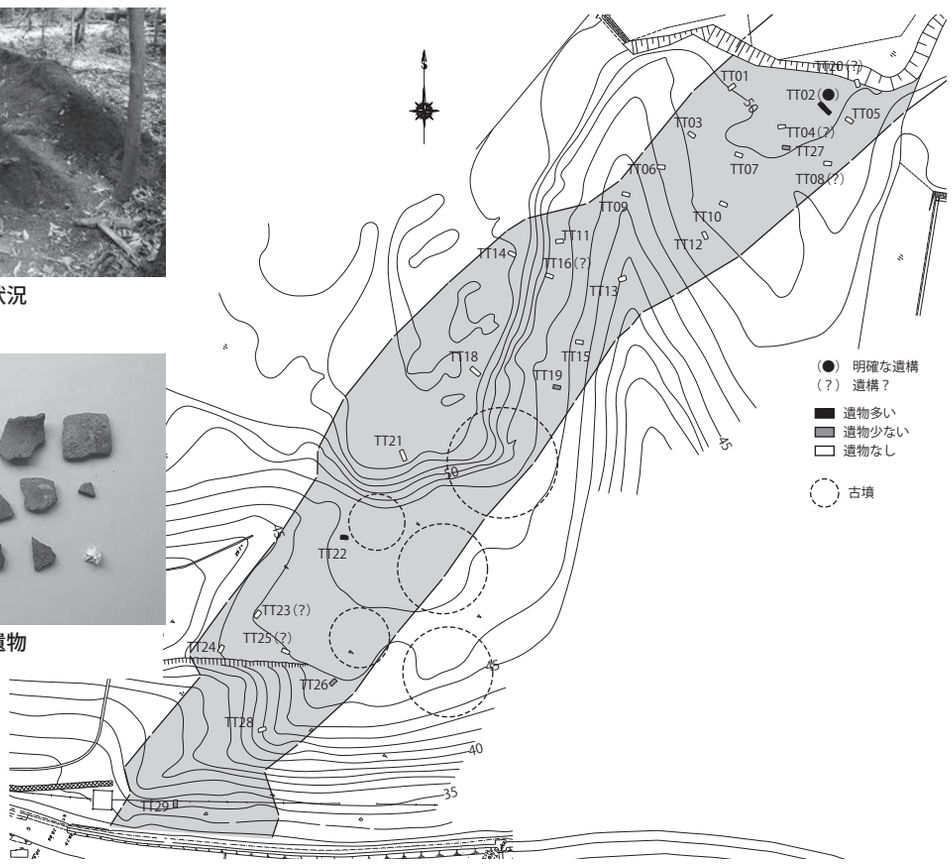
調査の経過　発掘調査は道路改良工事（一般国道151号一宮バイパス）に伴う事前調査として、愛知県建設局道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。

調査の概要　花ノ木古墳群は西原台地の縁辺に立地する。現況は雑木林である。古墳が分布する谷西側の南向き緩斜面については、TT22において弥生時代中期から後期の遺物のまとまった出土が確認されるが、TT19・TT26において遺物量は少なくなる。谷周辺、TT14・TT15以東、TT07以西については、遺構・遺物の出土は確認されない。

周知の遺跡の範囲外であった谷東側の南西向きの緩斜面については、TT02において、弥生時代中期から後期の確実な遺構とまとまった遺物の出土が確認され、少量ながら、TT27においても弥生土器の出土が確認された。この結果、TT07以東に弥生時代の遺跡が展開することが判明した。（早野浩二）


TT02確認状況


TT22出土遺物



花ノ木古墳群トレンチ配置図（1:2,000）